

---

**不条理って響カッコいいけど、腹立たない？**

迅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不条理って響カッコいいけど、腹立たない？

### 【Nコード】

N92310

### 【作者名】

迅

### 【あらすじ】

どこまでもヒロインな感じにしようと思ったけど、作者暴走の為どこまでもヒールになってしまったユウ（美少女？）と、無駄に（主にユウの）死亡フラグを立てる（イケメンなのに）変態がおりなす酷いお話。

ジャンルは『推理』になってますが、8割コメディのような状態です。極たまに推理が出てきます。

## 1話（前書き）

文章メチャクチャです。

2話からまでも（多分）になっているんで、見放さないで！

## 1話

世の中には不条理なことがある。

初めての彼女が電波で宇宙と交信してたら近所の人に通報されて今は精神病棟に隔離されてることだったり、

父母が夢見すぎて「失われたアークを見つけに行く」といったきり消失することだったり、

そのせいで妹はハンパない現実主義者で11歳にして絶対零度並みの冷たい視線を習得したことだったりー（あれはやばい！ガチで、あんな眼で見られたら生きることが諦めなくなる…）、

親友が死ねばいいのって思うくらい主人公みたいな奴で全国的にファンクラブができてるのに道を踏み外して男一（俺）を襲おうとしていることだったり、

それなのにファンクラブは解散せず未だに増員し続けていてトチ狂ったファンが嫉妬して俺に闇討ちしてくることだったり……………

いろいろあるが、その最たるものは、

親友が「日本じゃ同性結婚できないからオランダに行こう」とか云い出して

俺が「死ね」って返したら

親友が「じゃあユウ、性転換して女の子になって」とか何か腹の立つ笑顔で云い出して

俺が「兎に角、苦しんで死ね」って返したら、急に意識がなくなっ

気が付いたらあきらかに違法な感じの建物のベッドで寝てて、なん  
か胸のあたりが重くて、股のあたりがすっきりしてて…

なんかもう、世界が滅びれば良いのに

1話（後書き）

もはや親友ではないな…

## 2話（前書き）

ユウ君は女の子にされてしまいました。親友だった変態に…

性転換手術って、しちゃうと元に戻れないらしいです。大変ですねー  
ユウ君は美人です。変態に軽く整形もされました。

## 2話

「ゆうー！！！！！！」

金曜の学校が終わり明日からの3連休をどう過ごすか荷物を整えながら考えていると、変態のイケメンボイスが教室に響いた。

声の主は後ろに女性を引き連れながら隣のクラスからやってきた。あきらかにこの学校にいる女生徒の人数よりも多い…

ウチの制服を着た女子高生達に、

ウチの学校に勤めている女教師達（何やってんの？あんなら…）、

ウチのではない制服を着た女子高生達（どうやってきたの！？学校は！！？）、

どう考えても社会人の年齢の女性達（仕事は？ニート？）

などなど（てか後半の方々どうやって入ってきた！？）……………

と、まあツツコミ処満載なんだが、見慣れすぎてツツコミどころか溜息も出ない。

断っておくが、隣のクラスからの距離は10メートルもない。どうなってるの？

「3連休暇？暇だね！よし、2人だけで温泉いこー」

女性を引き連れたいつはかつて親友だった男。しかし、もはやただの変態である。

その変態は頭でも打ったのか、意味の分からん提案を唐突にしてくれた。

「やだ。断る。バカ、アホ、ドジ、マヌケ、アホ、シネ変態」

当然断る。

行きたくないし、こいつ変態だし、一応今性的には『女』だし、



それに……

仮に行きたかったとしてもこの場で yesなんて答えたら、後ろの方々に物理的、もしくは社会的に抹殺されるだろう。

てか、気付け！鈍変態！テメーの変な提案のせいで殺意の濃度が異常に濃くなってるわ！！

もともとこいつが、異常な人数の女性を引き連れて来たせいで男子生徒諸君の視（死）線が変態に、馴れ馴れしく話しかけたせいで女性諸君の視（死）線が俺に、集まっていたのに、

2人だけで温泉だあー？ しかも泊りがけで？

下水で窒息死しろ！！変態が！！！！

この場にいる全員の頭の中で

イケメン・モテモテ

男×女（美人）×高校生（若気の至り）×泊まり（二人つきり）  
大人の階段の〜ぼる〜

が成立したわ！！

そののせいで、この場は発狂寸前、男性陣・女性陣の中の複数人がナイフやらバット（釘が打ってあります）やらを何処からか持ち出し始めたわ！！

「え〜、いいじゃん、いいじゃん！お風呂で背中流してあげるから

〜

違うよ。こいつアホで、バカで、変態で、何も考えてないから！！だから、斎藤先生数学の単位落とさないで！（ガチでヤバいから！！）、そこの婦警さん銃口こっち向けないで！！

「う〜ん…そうだ！行ったら、いいコトしてあげる（笑）」

もう黙れ！ 何が（笑）だよ！こっちは（危）だよ！周りは（怒）

だよ！

「布団の中で温めて、いい子いい子してあげよう」

…よし！逃げよう。

鞆を持ち窓から飛び出した。その瞬間、教室内の均衡が崩れ、およそ女性のものとは思えない罵声の数々が聞こえてきた。そして、俺の横をナイフや銃弾がかすめた。

教室、一階でよかつた。心の底からよかつた。

そう思っていると、何かが俺の横に並んだ。変態だった。

「みんなどーしたんだろーね？…そんなことより！いこーね、温泉！」

まだ言うか！？

変態を蹴り飛ばし、まいてから帰宅した。

3連休をどう過ごすか考えながら風呂に入り、夕飯を食べているとだんだん体が重くなってきた。なんでだろう？デジャブが…悪い予感が…必死に眠気に抵抗したが…  
…  
その後の意識がない…

気が付くと変態が横にいた。車の中だった。変態の車だった（無免許です）。何処かに向かっていた。縛られていた。

「あっ、目、さめた？大人しくしててね、もうすぐ着くから」

………

なんかもう、みんなみんな死んでしまえ。

## 2話（後書き）

次くらいに（あれば）事件起きます。  
ジャンル、推理にしているのが申し訳ないです…

### 3話(前書き)

過去の話です。  
変態視点です。



性からの（穴が  
あきそうなくらいの視線や（男性からの）殺気を感じた。

そんなある日、いつものように約束を破ってしまったことを（悪漢をフルボッコにした後）後悔していると、倒れてる奴らの周りを人影がうろちよろしていた。

よく見ると自分と変わらない、もしくは自分より幼い……

少女？

分からなかった、『それ』の性別が。

艶やかな黒髪。少年にしてはやや長め、少女にしてはやや短めという微妙な髪型に、

少年というには可愛らし過ぎる顔立ち、少女というには武骨過ぎる雰囲気、

（中性的というよりは……少女……より……かな？）

などと考えている間も、『それ』はガサゴソと何かをし続けている。よく見ると、『それ』の通った後にはパンツ1枚の男たちが転がっていた（1月にあれは寒そうだ）。

流石に驚いた。

(まさか、追い剥ぎとは……、しかも、財布だけじゃ飽きたらず服まで……)

あまりの驚きに、つつい『それ』の肩に手をかけて呼び止めてしまった。

「おい、ちよつ、何し……」

瞬間、鈍い音が路地に響いた。そして、鋭い痛みが腹部を襲い、あまりの痛みにひざが折れた。

一撃だった。

毎日のようにケンカするだけあって、それなりに自分は強いという自負はあった

不意打ちとはいえ一撃とは……

『それ』は、一撃でK.Oして倒れているのを無視し、10分間急に容赦なく攻撃し続けた(顔面2割、腹部1割、股間7割……よく無事だったな、オレのナニ……)

痛みに悶絶しながらも、オレは新しい驚きに満たされていた。

遠く意識の中に正面から見た『それ』の眼は、濁っているのにも関わらず、鮮

やかな黄土色?金色?に光っていた。

綺麗だった。

もつと見ていたかった。しかし身体があまりの痛みに耐えきれず、意識が消えた



。

目が覚めると幾つもの顔（全て女性）がオレを囲んでいた。

オレ（裸です）を見つめる眼は全て、あの眼に遠く及ばなかった。

あの眼が見たい…

あの眼に魅入られてしまっていたようだ。

### 3話（後書き）

すみません。

3話で事件起きるって予告したのに…

大丈夫、まだ3話続く（今決めた）！

今度こそ…

期待していた方（いないか！）、本当に申し訳ない。

### 3・5話(前書き)

まだ4話じゃないよ。

3(・5)話だよ。

だから大丈夫!!……何がぁー!!???

### 3・5話

再会は3ヶ月後の中学校の入学式の日だった。

面倒な入学式を終え割り振られた教室に向かった。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!  
いた!

あの外見と雰囲気の特徴的な不調和のおかげで、教室に入っすぐ気がついた(てか教室人多いな:なんでこんなに女子が??)。それまで生きてきた中で一番の驚きと喜びだった。

(まさか、こんなに早く再会できるとは!しかもこんな身近に!!)

しかし、そいつは予想外に詰め襟を着ていた。

(男:だったのか...)

少し動揺しつつも早速声をかけた。またいきなりK/Oされては(股間が)かなわないので、十分警戒しつつ、だ。

「よお!久しぶりだな、オレのコトおぼ、え:て!?!」

愕然とした。

一番の驚きはものの30秒で更新された。

振り向いた彼の眼は、どこまでも探し求めていたそれではなかった。濁りながらも鮮やかな金色に光っていた眼は、  
澱み、光を失い黄土色ですらなくなっていた。

その変化はあまりにも大きく、頭の中を真っ白にするには十分すぎた。  
我を取り戻した時にはすでに担任が入ってきてホームルームを始めようとしていた。

担任や周囲の（男子）生徒らが怪訝そうな目（と女子生徒ら潤んだ瞳）でこちらを見ていたので、仕方なくその場を切り上げた。

「じゃ、じゃあまた後でな…」

彼は聞こえなかったかのように無反応だった。

ホームルームが終わり、（女子の）人混みを掻き分け（ホントに多いな…）彼の席に目をやると彼はもういなかった。  
さっさと帰ってしまったようだ。

次の日

昨日は緊張してあんなだったんだ…そうだ、きつとそうだと、自己暗示を掛け藁にもすがる思いで話しかけた。

「よお！いい天気だな…オレのこと分かる？」

眼は…昨日のままである。

「…」

（…ま、まあ仕方ないよなあ…向こうからしてみればサンドバツクのようなものだったし、オレ…）

「3ヶ月前会ったんだけど……ホントに分からない？」  
「まったく。てか誰？お前。」

（あれえ〜！?）

「ちよつ！きつ、昨日話しかけたじゃん！」

「？」

（削除されてる……何もかもが……）

今まで生きて来て一番泣きたくなった。

「そ、そつかあ〜……………オつオレ、へんかいたいが変界大我。変化の変に、世界の界で変界、大きい我で大我だ。昨日は自己紹介もできなかったからな……し、仕方ないか……………よろしくな！」

「さかさまきゆう坂咲遊。よろしく  
……世界を変える大きな我、か。御大層な名前だな……………ヘンタイでイイか。」

一人納得したように落ち着く彼、もといユウ。

「えっ？何が??」

訳が分からず聞き返したが、ユウは一人満足してしまい、なんの返答もない。  
授業が始まりそうだったので仕方なく席に戻ろうとすると、後ろから声をかけられた。

「ああ、そうだ！ヘンタイ！お前、目は大丈夫か？どう見ても今日は雨だぞ？まさか、冗談で言ったわけじゃないよな？だったセンスないぞ。」

カンカンカンカーン！！ Knock・Down！！ ヘンタイはユウの攻撃《冷たいツツコミ》を受けて力尽きた。

（ごめんなさい。軽くウケねりました…で、でもそんなボロクソ言わなくても…

てか、ヘンタイってオレのこと！？……ああ、変界のヘンに大我のタイでヘンタイか、上手いな…ってオイッ！！！！

……… ホントにセンスないな……）

どう考えても今日の（昨日もだったけど…）ユウには緊張感の欠片どころか、ナノミクロンも存在しなかった。

（やっぱりあの眼はもう失ってしまったのか…）

その日の夜、オレは考えた。

考えに考え、ついに悟った。

失ったのであれば、取り戻せばいい！

その日からオレの闘いは始まった。

ユウが荒んでしまった理由が分からない以上その理由を知ることが

先決だ。  
だから、とにかく話しかけ続けた。



### 3・5話（後書き）

変態の名前は以後出てきません。  
忘れましょう。

てか、変態編長いな！でもまだ3話だし…  
問題ないないよね！（オイっ）

いい加減推理関係無くなってるんだが…  
誠に申し訳ない。絶対だします。変態編で必ず！  
期待はしないでください……………

3・75話(前書き)

きた!

やっと来た!!!

事件が起きた!

……期待しないでね……

### 3・75話

2年の月日が去った。

いい加減あきらめかけていた。

オレはこの2年の間、ユウに話しかけ続けた（3年間同じクラスになれた、理事長（30前後の女性）に頼んだら「セツ（自主規制）してくれたらいい」と言うので…）。その甲斐あってユウの中で親友という立場を確立していた。

そのため色々なことを知った。

何故ユウが初めて会ったとき追い剥ぎなんかをしていたのか？（両親が夢の世界に旅立ってしまった、食い扶持を稼ぐためというのと、かわいそうな彼女がかわいそうなコトなってしまったことにたいする八つ当たりだったらしい…）

何故あんなにまで強かったのか？（両親が趣味？ライフワーク？夢？の手伝いを強要するために無理やり強くしたらしい 某メガヒツトマンガの孫悟空の初期修行と、拳から剣が飛び出してくる某アメコミばりの改造手術（流石にあんな特殊能力は無いが）を、足す前に数倍ハードにして、2で割ったかんじらしい）等々…

しかし、どんなに仲がよくなっても眼の輝きが失われた理由は分からなかった。ユウに尋ねても、オレをボッコボコにしてから再会するまでの3ヶ月間（生活のため日常的に追い剥ぎをして、妹の冷たい視線のせいで自殺しようとする人を思い止まらせ、彼女のためによく知らない相手（ベガあたりに住んでるらしい…人？）と交信しているユウにとって）特に変わったことはなかったらしい。

そんなある日変化は突然起こった。

ユウのリコーダー（の口をつける部分のみ）が盗まれたのだ。  
普通？リコーダーを盗まれるといったら犯人は異性の場合がほとんどだろう。しかし、今回の場合は……

…被害者がユウだから……

ユウは普段詰襟を着ているから一目で男子と分かるが、女装させたら笑えないでき…というか街で100人中（女子含み）90人は目を奪われる（残りの10人の内1人は盲目で1人はナルシストの女、3人はイタイ趣味の人、5人はホモ）ような外見だ（1度ユウが街で（男に）告白されているのを見たことがある。ユウはしゃべっているのも無視してそいつの身ぐるみをはいでいった。そいつは何故か法悦とした笑みを浮かべていた…そしてそいつのパンツには何故か真新しい染みが……忘れよう……ユウのためにも……）。

よって犯人が女子だと特定できないのである。

その日のホームルームの時間、ユウのリコーダーの搜索が始まった。  
指揮を執っているのが被害者であるユウだ。

「犯行時刻は昨日俺が教室を出た4時30分から教室の鍵がかかる

7時30分までの3時間と、朝教室の鍵が開く7時からユウが来る8時15分までの1時間15分だ。

さつき採ったアンケートの結果、この合計4時間15分の間にアリバイがあるのは部活動に勤しんでいた31人と、俺が帰るより先に帰宅し、なおかつ俺より遅くに登校してきた7人だ。ちなみにこのクラスは全員で44人。被害者である俺は除くので、容疑者は残りの5人になる。」

ユウが容疑者を黒板に書き出していく。

- ・ 佐野 辰巳 さの たつみ 男 不登校
- ・ 杉本 望 すぎもと のぞみ 女 病気がちであり目立たない子。
- ・ 橘 稔 たちばなみのり 女 クラスで1、2を争うおしゃべり。
- ・ 萩 小百合 はぎ ゆり 女 クラスの委員長。
- ・ 変界 大我 へんかい たいが 男 学校にいる女性（ユウ妹を除く）全てを支配する。

「以上の5人だ……………」

あれ？

ユウがこつちを見てる…教頭分かりやすいのカツラを見るような目で……

「おい、ヘンタイ！お前…今朝珍しくむかえに来なかったな？何処で何してた？」

ユウがゴミを相手にするような無機質な目に、ゴキブリを相手にするような嫌悪感丸出しの声で尋ねてきた。



### 3・75話（後書き）

え〜…とりあえず、ごめんなさい。

推理を期待していた人……精進します…

下ネタ嫌いな人…ホントにごめんなさい！

調子乗りすぎました、もうこれ以降（出来るだけ）出しません！

次は解決編です。がんばっていきー！

3・875話(前書き)

長くなっちゃいました・・・

ついに変態覚醒!!

これから本番です!!(いまさら)



3・875話

数人の男子生徒がオレの鞆をあさりだした。  
止めさせようとした。が、出来なかった。

オレの周りに女子が集まって来てリコーダーを差し出してきた。

あれ？おかしいな？人数がどんどん増えてきてるぞ？あきらかにウチのクラスの人数より多い……

「隊長！ブツを発見しました！！」

一人の男子生徒が叫んだ。

(……やべっ……)

女子たちの迫り方が激しくなった。

あれ？男子生徒が信じられないものを見るような目＋何かすごい感情を籠めた眼

でこつちを見てくる。

あれ？あつちでユウも女子に囲まれてる。何か光る物を突出されて

…ユウの顔が  
凄く引きつってる……

突然

ユウが教室から飛び出した。それに引つ張られるように女子たちが皆追いかけて行った。

(ユウ、モテモテだな……)

何かモヤモヤしたものが胸の中に生まれた。

ユウが逃げて行くのを眺めていると、オレの周りを男子生徒が囲んでいた。

あれ？男子生徒の数が異様に多いな？

あれ？みんな口々に「お前さえいなければ」とか、「貯水タンクに沈めれば見つ

からない」とか呟いてる…

「死ね！！！！！！」

男子生徒が一齐に跳びかかってきた。

「ふう~~~~~……………」

何とか『コレ』だけは持つてこれた。

此処は体育館裏。男子生徒らを返り討ちにして逃げてきたのである。

男子生徒らに襲われながらも必死で持つてきた『コレ』とは…そう！

リゴッ！！？

突如、後頭部にももの凄い勢いで何かがぶつかった。

「オイ！このボケがつ！何栃狂ってんだ！？ああ！！！！？」

百歩譲って男が女のリコーダー盗むってんなら分かる。だがな、男が男のリコー

ダーぬす…………！！！！」

女子から逃げ切ったのであろう、息を切らしたユウがオレの後頭部へ跳び膝蹴りをキメ、一気にまくし立て…ようとした、が、オレの姿を見て言葉を失った……

「ピ——————っ！！！」

………そうです！

リコーダーが口に刺さって抜けなくなりました。

………テヘッ

「アホか——————！！！！何？アホなの？お前もの凄くアホなの？？」

てか、『テヘッ』じゃねえーよ！！キモいんだよ！死ねっ！！！」

さすがユウ！しゃべれないのに俺の意思が通じるとは！以心伝心？

………ああ…ユウが『テヘッ』ってやると、クラツとするな。

そして、そのまま抱きしめて頬ずりしたくなるな……

やっぱりユウとオレは赤い糸で……

てか、ユウのリコーダーおいしー！

…あれ？オレ、今、踏み出してはいけない一歩を踏み出してしまったような気が……

「おっ、おい？大丈夫か？」

ユウの『テヘッ』でよろめいたオレに、ユウが心配して寄りそってきた。

ス——————…はああ…ユウは男の子なのにいい匂いがする……

ガタンっ

ユウの香りを胸一杯に吸い込んでいると、頭の中で何かを外れる音がした。

.....

「ピーー？」

あれ？腕の中に何か小さくて柔らかいモノが…

あっ、いい匂い…どこかで嗅いだことがあるような……

まあ、どうでもいいか！ずっとこのまま……

「ビツフ！！？」

腹部に鋭い衝撃と、鈍く強い痛みが走った。

あれ？なんだろうこの懐かしい痛みは？

痛みで身体が崩れ落ちていく中そんなことを考えていると、今度は顎に衝撃が走る。そして全身のあらゆる部位に連続して衝撃が走る。もはや痛みで全身の力は抜け、立っていることもできない……はずなのに…身体が倒れない。いや、倒させてもらえない。倒れようとするとかが飛んできて身体が押し戻される。意識も飛びそうになるたび、衝撃で連れ戻される。

ヤバいなあ、このまんまだと死にそう…

そんなことをボンヤリと考え始めたころ、ふと視線を下げた……

！！！！！！

途端に頭の中が覚醒した。

ユウが目の前にいた。さっき抱きしめていたのはユウだったようだ。しかし、そんなことはもはやどうでもよかった。

ユウの…ユウの眼が…光っていた!!!

初めて出会った時のような、澱みながらも鮮やかな金色に輝く瞳。驚きのあまり、ずっと口に刺さって抜けなかつたりコーダーが、するりと落ちて行った。

ユウはリコーダーが落ちたことに気が付き、攻撃の手を止めた。

な、なんで？この2年間どんなに手を尽くしてもダメだったのに…  
・どうして？

頭の中を疑問が駆け巡る。身体の激しい痛みを無視してユウの両肩をつかみながら考える。

そして、初めて会った時と今のユウの共通点を発見した。

それは、『血』だ。

初めて出会った時、返り討ちにした野郎どもの血で辺りは軽く殺人現場のようになっていた。そんな中、追剥をしていたのだからユウも血だらけだった。

そして、今もオレの返り血を浴びて、ユウの全身のいたるところに血が付いている。

………そーいうことだったのか…大量の血を見ると、興奮して（へんな意味じゃないよ！）眼が輝くのか…

考え事をしていると、目の前のユウが妙に静かなのに気が付いた。何故か気まずそうに俯いている。

「ほうひはんだ？ユウ？（どうしたんだ？ユウ？）」

リコーダーを啞えたまま殴られていたため、口内のあちらこちらが切れて上手くしゃべれない。

ユウは変なしゃべり方をしているオレの声を聞いて、さらに気まずそうにした。

「おひ！ほんとひだいしょふか？（オイ！ホントに大丈夫か？）」

ユウの顔を覗き込むが、輝きはそのままに申し訳なさを含んだその眼を一向に合わせようとせず、頻りに視線が泳いでいる。

口のケガのこと、気にしてるのかなあ？

等と考えていると、ユウが決心したように、おずおずと話し出した。

「あ、あのかな・・・これ・・・」

恐る恐る差し出してきた手に握られていたのは、オレ口から抜けてすぐさま拾ったのであろう、オレが啜っていたリコーダーだった。

「そ、そのな、・・・ここ見てみる・・・」

その血だらけのリコーダーをひっくり返し一点を指さす。

・田中 五郎たなかごろう

・・・・・・・・・・・・・・・・だれ？

意識が飛びました。

3・875話(後書き)

やっちやいましたね!

なんか変なのばっか!!このお話・・・

次で『変態視点過去回想編』 終結です。

早く『湯けむり編』 やりたいなあ〜

3・9375話(前書き)

ちよいネタばれですが・・・

世の中の田中さん！本当にごめんなさい！！



ああ……そうか……このモヤモヤしたものは『恋』だったのか（ヤベエ！クセエ！）

気がつくのと、すぐさま意識が消える前のコトを思い出した。そして、自分のいる場所が何処か思いついた。

……きつとユウの家だ

ユウは出会ってからこの2年と数ヶ月の間、一度として家に招いてくれたことがなかった。もちろん、家族の事情や今までの経緯は教えてくれた。だけど、どんなに親しくなっても家には連れて行ってくれなかったのだ。

一度も来たこと無いけど、ここ……ユウの家だよ！絶対そうだよ！まさか、人が校舎裏で血だらけで倒れてるのを無視して帰ったりしないよね？

そう考えるとだんだんテンションが上がってくる。手元にあった枕に抱きつき、そのまま顔を埋めた。

うわあ、ユウの……に……おい？

あれ？なんか……ちょっとイカくさい……

その枕からは記憶の中のユウの匂いとは全く違った。

……が

……

…興奮してきた……！

枕を抱き締めたまま妄想（ち、違うよ！け、決してイ、イヤラシイモノじゃな、ないんだからね！）に耽っている、足音が聞こえた。その足音は確実にこちらに近づいてくる。そして、ドアの前で立ち止まった。

オレは少しでも早くユウに会って、抱きしめようと思ひ、まだ痛む身体に鞭打ってドアに近づいていった。

足音の主がドアを開け、入ってきた瞬間、抱き締めた。

ムギユ

ハア〜、やっぱりユウは…硬い……？

あれ？ユウ、大きくなった？

あれ？なんかゴツゴツしてる…

あれ？なんかムサイ臭いがする……

あれ？チクチクする……

抱きついたその感触は、どう考えてもユウのモノではなかった。

恐る恐る腕の中を見ると、そこにあったのは……

…ウニ…？違った！坊主頭だ！

そうと分かった途端、それを突き飛ばすように離れた。

ツンツンとした坊主頭、低い鼻、無駄にでかい口、濃い眉、尖った耳……『田中』って苗字っぽい容姿だな…

あれ？田中ってどこかで…？

そいつは多少よろけて、気持ちよさそうにニヤニヤとした下卑た笑みを浮かべている。

嫌悪感しか浮かんでこない…

「……誰だ、お前？」

「オレか？オレは……」

そいつは尻ポケットから『出来ればもう一生見たくなかったモノ』を取り出した。

「オレはコイツの持ち主さ。」

……  
……  
……田中五郎さんですか……

田中五郎はリコーダーを愛しそうに眺めている。そして、厭らしい笑みをこちらに向けてきた。

その瞬間理解した。田中五郎という人間がいわゆる、世間一般でいう『H O M O』のメンバーだということを……

何でだろう？何故か親近感が……

・『H O M O』ノメンバー、タナカゴロウガアラワレタ

・タナカゴロウノコウゲキ

・ヘンタイハタナカゴロウノコウゲキヲヨケタ

・ヘンタイノコウゲキ

・タナカゴロウ ハ モンゼツシタ

・ヘンタイ ハ ニゲダシタ

・シカシ マワリヲカコマレタ

・タナカゴロウ ノ コウゲキ

・ヘンタイ ハ ヨケキレナカッタ シカシ コウカ ハイマ  
ヒトツノヨウダ

・ヘンタイ ノ コウゲキ

・タナカゴロウ ヲ タオシタ

タララツタツタツタツ

ヘンタイ ハ レベルアップ シタ

スバヤサ ガ 3アガッタコウゲキリヨク ガ(以下略)

ヘンタイ ハ 『ユウ探知』 ノ ノウリヨク ニ メザメタ

ヘンタイ ハ ダンジョン『HOMOS LOVE LABY  
RINTH』カラ ダツシュツ シタ

「ユウ!ヒドい!!!人のことあんな所に放置するなんて……もう、

終わりよ。アナタには付き合いきれないわ！金輪際話しかけないで  
ちょうだい！」

「…うん…そうだな、バイバイ」

………… ツンデレ失敗

ユウは一瞬たりともこちらに視線を向けず、マンガ雑誌を読みふけ  
っている。

事件解決から土日を含み3日がたった。

あからさまな周囲の変化は無かったが、事件を境にオレは机や、ロ  
ツカー、下駄箱、はたまた鞆にまで、見知らぬ、リコーダー（口を  
付ける部分）や、靴下（女物）、酷い時はパンツ（女性用16枚、  
ブリーフ3枚、トランクス1枚）まで入れられるというイジメを受  
けるようになった…

そして、変化はもう一つ

あの田中五郎が行方不明になった。

何でもこの土日に街でオレをホツた（どういうこと？気絶したとき  
に何かされたみたいけど…）などと吹聴していたところ、謎の集  
団に拉致されたらしい。犯人は顔を隠していたが、体型から見て全  
員女性だったらしい。

と、まあここまでではどうでもいいとして…

問題はユウだ。今まで探し続けていた『眼』が見つかったのはいい  
が…完全に虜になってしまった。もうあの眼無しでは生きてい  
けそうにない。



ユウは読んでいたマンガ雑誌を放り捨てて一目散に逃げ出した。どこから現れたのか、逃げ出したユウの後をおよそ50人ほどの覆面をつけた集団が追いかけていく。体型的に皆女性だろう。中にはウチの制服を着た者や、婦人警官の恰好をした者までいる。

やっぱり、ユウもてるんだなあ・・・

覆面にコスプレしてまで姿を隠すなんて、とってもシャイなファンたちだなあ・・・

覆面女性集団ってどこかで・・・？

でも、ホントにどうしよう？日本じゃ結婚できないから、オランダか、ベルギーか、スペインか、ノルウェーか、スウェーデンか、ポルトガルか、カナダか、アメリカのマサチューセッツ州に行かないと・・・

ユウはどこがいいのかな？

・・・・・・・・・ホントにそれでいいのか？

ふと頭の中に疑問がもたげる。

もしユウがオランダか、ベルギーか、スペインか、ノルウェーか、スウェーデンか、ポルトガルか、カナダか、アメリカのマサチューセッツ州で素敵な女性に出会ったらどうする？同性結婚もできないではないか！

どうしようどうしようどうしようどうしよう・・・

・・・・・・閃いた・・・

ユウには女の子になってもらおう！・・・





### 3・9375話（後書き）

まさかの新キャラ登場ですね！もう出てこないけど・・・

この後は・・・皆さん御存じのとおりです

もうちょい細かい設定をこの変態編で紹介したかったんですが・  
・いい加減本編戻らないと誰が主人公（ユウですよ！）だか分から  
なくなりそうなんで・・・

おいおい紹介していきます。

## 4話(前書き)

やっと湯けむり編ですね。

## 4話

ここは関東内陸のとある……と云うより俺の全く知らない街

温泉で有名で、「知る人ぞ知る」なんて陳腐な前振りが当てはまる

(良く云えば) 趣き……のある街だ。

何故こんな処にいるのかと言うと……まあ、簡潔に云えば「薬を盛られて眠っている所を拉致された」(これって訴えれば勝てるよね?)

目的地に到着。ロープを解き、何を考えているのか、さも当然のように抱きつこうとしてくる変態の肝臓レバーにショートアッパーをねじ込み、痛みに悶えているのを無視して丁度いい高さに來た顔面に膝を叩きつけた。衝撃で仰向けにひっくり返った変態の顔を靴の裏で押さえつけて動きを封じる。いつもなら、ここからトウキックでアバラを4〜5本折るのだが……今日は許してやろう。

なんたつて温泉だ！

確かに初めは来る気は無かった。変態と二人きりと云うのはいろいろ危険だし、ツラも心配だし……(坂咲蕩さかききつら 今現在、生死の確認が取れている唯一の肉親だ。名前は俺のも、ツラのも、両親が付けた。由来は……遊+蕩=遊蕩? だらしなく遊びにふけること。酒や女遊びにふけて、品行のおさまらないこと……ザケンナ、コノヤロー……!! ああ……!!? 誰がだらしなく遊びにふけてるって!? 誰が品行がおさまらないって!? 全部テーマー等なことだろうがっ!!! 死ぬッ! 屑がッ! この世で一番苦しい死に方しろッ!!!)

だが、着いてしまったのでどうしようもない。歩いて帰れる距離じゃないし、

ツラも、もう15歳。3日間ぐらい一人でも大丈夫だろうし、

変態は：変態自体がアホだし、変態のせいで振りかかる災難（85%は女性絡み、5%は『H O M O』絡み、残りの10%は流血沙汰）はいつもの事だから……

よって！今回は楽しむことにした。

よくよく考えてみると、普通？の旅行なんて初めてだな。

もっと小さい頃はアホ共（父・母）にいろいろな所へ連れていってもらった？……と云うより連れまわされた。

何？ムウ大陸の入り口って？

東京都心の下水道にあるもなの？

てか、何で息子の俺が下水に潜って、探してる本人たちは横でイチヤイチャしてんの？

儀式とか言ってたけど絶対違うだろ！だって明らかにルーレット回してたじゃん！「左手を青に……」「右足黄色よ……」「右手青に……」「ムニユ」「いやん？エッチ？」とか楽しそうにやってたじゃん！！

………あー……アホ共（父・母）のこと思い出したら、  
だんだんムカついてきた……

苛立ちを紛らわせるためその場で地団太を踏む

グシャッ！

ん？鼻が潰れた様な音がするなあ？

ンムグツ！ムガツ！

ん？口に靴を突っ込んでしゃべったかの様な音がするなあ？

辺りを見回すが、これといって変なものは無い。下を見ると・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・あつ・・・・・・・・忘れてた・・・・・・・・

変態が必死に靴の裏から抜け出そうともがいている。

さつき地団太を踏んだ時潰れたのであるう鼻から大量の血を流している。

変態は俺が見ていることに気付くと満面の（鼻が変な方向に曲がり、鼻血ドバドバ流しながら）笑みで返してきた。

いくら廃れてると言っても人通りはある街の道のだ真ん中、血を流しながら顔を踏まれつつも、笑顔の男と、その上でしかめっ面して物思いにふける女。

・・・シユールだな・・・てか奥さん！変態に見とれるのは分かる（いや、本当は全く分からん）が、子供の眼は塞いであげて！子供に見せちゃいけない絵ずらだろ、コレ！将来どうなっても責任取らないよ、俺！

・・・てか・・・・・・・・何でこいつ・・・嬉しそうなの・・・？

・・・そういえば、こいつが嬉しそうにしてる時って大抵、俺にぶん殴られて大怪我してるな・・・・・・・・

・・・悲しくなってきた・・・何でこんな変な奴になっちゃったんだろう・・・初めは気が効いて（金持ってて）、面白くて（金持ってて）、一緒にいると（金持ってるから）楽になれる、（金がどんどん出てくる）いい奴だったのに・・・・・・・・

「はあく・・・何でだろうなあ・・・まあいいか・・・まだ、どんどん（金が）出てくるから・・・オイ！宿ってどこにあるんだ？」

「むがつ・・・ムゴツムゴツが」

俺の質問に靴を舐めるように答える変態

「ん、あつちか・・・」

変態の言った方向に歩きだす。

・・・・・・今、変な所があった気が・・・忘れよう・・・

歩いていると、少し遅れて変態が追いついてきた。

いつも道りの整った顔で・・・？変態にはゴキブリ以上の生命力があり、ピコロ並みの回復力があります。見つけ次第、然るべき所に連絡し指示に従い、速やかに焼き殺しましょう。  
宿へ向かった

「ここか？」

「そーだよ どう？結構いい所じゃない？」

確かに・・・どこまででも金が出てくるだけある。この寂れた街で唯一、『ボロイ』ではなく『古い』建物だ。外装に歴史を感じさせるものの、それすらも取り込み調和している。違和感があるとすれば、この街があまりに寂れ過ぎているからだろう。ここまでの旅館はなかなか無いだろう。

中は完全な和式造りで、和む雰囲気醸し出している。

「ポーーーー……………」

「あー…………予約した変界ですけど…………チェックインしたいんですが……………」

「…………へ？あ、ああ…………ようこそ葵屋旅館へ。女将の芳枝よしえと申します。変界様と（俺を見て…………？睨んで）そのお連れ様ですね…………。お部屋の用意は出来て居ります。さあ、こちらへ。」

女将さんが部屋に案内してくれる。結構若い女将さんだ。多く見積もっても30はいつて無いだろう…………

…………はあ…………早速か？到着して5秒でか？5秒でも俺に死亡フラグ立てるのか？

明らかに客に対して向ける視線じゃなかったよ、女将さんのアレ。俺に対しても、変態に対しても！

部屋の前に到着した。諸注意を受けていると、隣の部屋から3人組の……………

…………はい…………二つめえ……………

…………はあ…………何だよ？何で選りにも選って『女なんだよ！既に全員俺に視（死）線向けてきてんじゃん！』

ああ……………みんな…………俺に何の恨みがあんの？

## 4話（後書き）

前置き長い！

・・・次で事件起きる・・・かな？



4と0・025話(前書き)

事件勃発!

今回は早かった!



よし！女湯にしょー

仕方ないよね！今、『女』なんだし！『女』にだってなりたくてな  
った訳じゃないし！悪いのは変態の馬鹿であって俺じゃない！

決心？が着いたので早速温泉へ向かう

「おんせん おんせん」

脱衣所で服を脱いでいく。荷物がこの使用状況から見て、温泉には  
一人しかいないようだ…

べっ別に落ち込んでなんかないよ！

その一人に希望を託しているから！

いざ、<sup>バラダイス</sup>女湯へ！！

ガラガラッ

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!????????

.....

「うわあゝ、ひろーい」

テクテク

キュツキュツ

ジャー

キュツキュツ

チャポン

フー—……

……………

ザバツ

テクテク

ガラガラツ

ふきふき

よいしょっ

……………

「いーお湯だったー」

脱衣所を出ると女子大生らしき数人のグループが入れ替わりで脱衣所に入って行った。

……………ヤバいな……

数十秒後、後ろから悲鳴が聞こえた。

ダンッ！！

「いい加減認めなさいよ！あなたがやったんでしょ？」

俺は今、葵屋旅館の一室にいる。……いや、正確に云うならば閉じ込められている。

何故かと云うと……温泉で殺人事件が起きたらしい……

そして、俺はその殺人事件の『最有力容疑者』になっている。

……

何故か、俺が温泉の扉を開けると、湯船に『何か』が浮かんでいた……俯きで……

そのまま見ているとピクリとも動かないので、諦めた。んで、見なかつた事にした。

フツーに身体を洗い、『それ』が浮かんでいる湯船にゆっくり、フツーに30分程浸かり、フツーに温泉を出て、フツーに身体を拭いて、フツーに服を着て、フツーに脱衣所を出て、目の前にあったものを忘れようとしていると……たまたまハネムーンで来ていた新

婚刑事さん夫妻に、この部屋に連行されて、『最有力容疑者』にな  
っていた。

・・・・・・・・ナンデウタガワレテルカ、マッタクワーカアリマセ  
ン

「ちょっと！聞いているの!?!」

んで、俺の前で五月蠅く騒いでるのが、刑事さん(妻)。やたらと  
突っかかってくる・・・WHY?

刑事さん(妻)の後ろで刑事さん(妻)を宥めているのが、刑事さ  
ん(夫)。チラチラこつちを見て・・・・・・・・あぁぁぁぁぁぁぁ  
なるへソ・・・迷惑だ!!

「なんで殺したの?」

グウ~~~~

そーいえば、変態に拉致られてから何も食ってないなあ・・・腹減  
った・・・

パンツ!!

「真面目に聞きなさい!!!」

腹の鳴る音に反応して刑事さん(妻)が怒鳴る。

ふぁぁ

温泉で温まった身体が眠気を訴えてくる。

ドンッ！！

刑事さん（妻）が机を叩く。

「器用ですねえ、同じ机なのにこんなに沢山の音が出せるなんて。」

あまりに違う音を出すので、思わず声に出しまった。

刑事さん（妻）の顔が歪む。無言で手を振り上げた。そして、そのまま振り下ろそうとした、

その瞬間

「ユウ！！大丈夫！？」

変態が飛び込んできた。そのまま抱きつこうとしてきたので、顎に頭突きをし勢いを殺ぐと、頭突きをキメたのと寸分違わぬ場所にアッパーカットを叩きこむ。変態の顎が完全に上を向いたので、から空きになった喉に地獄突きをした。後ろに倒れ、喉の痛みに苦しむ変態。

ふと思い出して刑事さん（妻）を見ると、振り上げた手を恥ずかしそうに下げ、顔を朱に染めつつ背け、チラチラと変態の顔を盗み見ている。

刑事さん（妻）は俺が見ている事に気付くと、ハッと我に返った。

「な、何やってるんですか！？殺人罪に加えて暴行罪の現行犯で逮捕します！」

「ハア？ちゃんと目え、見えてんの？どう考えても正当防衛だろ！こいつがいきなり抱きついてきたんだから。むしろ、こいつを『強

制わいせつ未遂』でしょつ引くべきだろ!!」

「っ!!・・・そ、そんな事より!あなた達どういった関係ですか?事と次第によっては『不純異性交遊』も追加しますよ!!」

「警察が犯罪目の前にして『そんな事』かよ?」

「い、いいから答えなさい!!」

「そんな義務はな「夫婦です!!」い・・・」

グシャツ!!

足元から意味不明な叫びが聞こえてきたので、取りあえず音源を絶つ。

てか、さっきの地獄突きはクリーンヒットして声帯を潰した筈だ。普通なら声を出すどころか、呼吸さえ間々成らない。それなのに、ものの1分で回復するとは・・・なんて奴だ・・・だが、今度は首ごと足で踏みつぶした。これであと10分は静かなになるだろう。

刑事さん(妻)を見ると、絶望に打ちひしがれていた。

・・・そんなに凹まなくても・・・てか、あんた既婚者だろ!しかも新婚の!

見ていて、あまりにも不憫だったので声を掛けてやった。

「お、おい・・・嘘だぞ。このバカの頭が可笑しいだけだぞ。どう見てもこいつ、18じゃないだろ。16だから。まだ可能性(?)」



あるから。」

おずおずと声を掛けてやると、さっきまで凹んでいたのが嘘のように  
に晴れやかな笑顔になった。今度は後ろの旦那さんが可哀想なぐら  
い凹んでいる……新婚早々、夫婦の間に罅が……  
……俺、しーらね。

4と0・025話(後書き)

ん〜とね・・・

・・・ユウだって男の子です!!決してユウがスケベな訳でも、エロい訳でもありません!  
そこら辺、注意するように!

4と 0・5625話(前書き)

少々間があきました。  
申し訳ない。

4と0・5625話

死んでいたのは焔はたきようし 教子

隣の部屋に泊まっていた3人組みの内の一人だったようだ。

死因は……分からない。刑事さん(妻)曰わく、

「外傷がなく、死因を特定する要素がない。解剖してみれば分かるのだが……」

との事。しかし、誰も電話にでんわ……止めましょう。

何故か分からないが、この街の電話が全て繋がらないのだ。携帯電話なんて当然のごとく圏外。外部と連絡が取れないのだから警察が呼べず、警察が呼べないという事は解剖が出来ない。よって、死因が分からないのだ。

しかし、そのまま放置し続ける訳にもいかず、刑事さん(夫)が近くの街に電話を借りに行った。もの凄く不安そうに妻と変態を見ていたが、刑事さん(妻)の「邪魔よ」と言う発言に泣きながら跳び出して行った。

……俺のせいじゃないよね？

刑事さん(夫)が出て行ってから3時間が過ぎた。

隣街にただ電話を借りに行くだけなのに時間が掛かり過ぎだ。気付いていないようだったので俺がその事を指摘すると、刑事さん(妻)も(変態に熱い視線を送りながら)「遭難でもしたのかしら？」と(口だけ)心配そうに言っていた。

遭難……？…そうなんです……ごめんなさい。

遭難じゃなくて、逃げたんじゃ……

……ホントに、ホントに、俺のせいじゃないよね？

更に1時間

腹の減った俺は飯の事を考え、そんな俺にしつこく話し続ける変態、俺の存在を消し、変態の言う事全てに反応する刑事さん(妻)

.....暇だ.....

いい加減退屈になったので席を立ち、扉に向かう。

「ちょっと！何処行くつもり!?」

流石に無視しきれなくなった刑事さん(妻)が呼び止めてきた。一刑事として容疑者を見す見す逃さないために呼び止めたと言うよりは、俺が出て行くことで変態もいなくなってしまふのが嫌だと言う感じだ。

何度も言うが、既婚者だから！この人！しかも新婚ホヤホヤ、結婚してまだ5日！

.....あっ.....

もしこれで、刑事さん(夫)が遭難して戻ってこれなかったら、この人『刑事さん(未亡人)』になっちゃうな.....

.....どーでもいいか!!

「あくまで『任意』だろ？だったら俺が何処に行こうと俺の勝手だ」

「っ!!そ、それなら私も同行します！見す見す犯人に証拠を消されては警察の恥ですからね」

ダウト！このアホ(変態)と一緒にいたいだけだな。

しかし、刑事さん(妻)が一緒となると.....鬱陶しいな.....

.....イヤだなあ.....!閃いた!!

「オイ、変態！この部屋にいる、俺が良いって言つまで」

「ユウは？」

「俺は旅行を楽しむ」

「オレも一緒にイクウ」

「一生話してやらんぞ？」

「了解致しました！！」

うむ。従順でよろしい。

俺は悠々と1人で部屋を後にした。

えっ？刑事さん（妻）？アレ？へヤカラデテコナイ。ナンデダロウ？マツタクワカラナイナア」。

鬱陶しいのは消えた。いつも周りで五月蠅いのも消えた。このまま戻らず、『良い』と言わなければ、きっとアイツは一生出てこないだろう。

・・・よしっ！これからの俺の生活が豊かになる！

女教師が担当の教科が自動的に赤点になる事もない。

俺の私物が（変態に）盗まれる事もない。

一日平均17本ものナイフが飛んでくる事もない。

なんて素晴らしい人生なんだ！！

意気揚々と歩いていると1つの視線に気が付いた。かなりドロドロとした視線だ。振り返るとサツと身を隠してしまった。よくある事だ。

しかし、もうそんな事は起こらない。原因である変態がいないのだから！アイツは一生あそこから出てこない！ああ、俺は自由だ！

グウ~~~~

.....

食堂へ向かった。

1日半何も食べてないのだ、流石に腹が減った。ついでに変態の魔の手から逃れた祝杯でも挙げよう。

いい旅館だけあって、食事もかなりのモノだろう。値段の高い順に料理を頼んだ。

えっ？金？どうせ全部変態の懐から出ていくんだからカンケーないね！

1日半ぶりの食事を楽しんでいると、向こうの方から1人の女が歩いてくる。通常だったら気にも掛けない。それどころか、存在の認識すらしなかつただろう。だが、気が付いた。視線が外せなくなつた。

何故？

一直線でこちらに向かって来たから？

最近テレビでよく見る顔にそっくりだったから？

親友と話すかの様な馴れ馴れしい笑顔でドロドロとしたタールの様な視線を向けてきたから？

そのドロドロとした視線に身に覚えがあったから？

いや、違う。その女が鼻糞ターザンしていたからだったからだ。それ以外は、女が来るまでに気が付いたのだ。

「こんにちは。席、いいかしら？」

「……………」

俺が無言で俯いて肩を震わせていたのを了承の証と取ったのか、女は正面の席に着いた。

ヤメテくれえ〜！！何で正面の席なんだよ！どうしろってんだよ、あのターザン！？（鼻毛の）森の王者にどうやって勝ってんだよ！！

「ど、どち…らさ…ん？」

「えっと…隣の部屋の岸きしあに 藍子いんこです。今朝自己紹介したんですけど…」

ああ、あのプカプカ浮いていたのと同室だった奴か…あれ？岸藍子ってもしかして！？

顔を上げて、相手の顔を確認する。確認すると、同時にすぐに俯いた。

…本物だ…本物+ターザンだ…人気アイドル+ターザンとか原爆並みの破壊力だろ…ダメだ！見てはいけない！見たら石にされるところか、粉々に砕け散ってしまう…俺の理性が…



俺が俯き続けるのを見て、岸藍子は俺が緊張しているのだと勘違いしたらしく自ら話し始めた。

「あのね、ちょっと聞きたい事があるんだけど・・・彼は？」

？

誰の事だ？

「ほら、何かの手違いで同じ部屋に泊ってる、彼よ」

「・・・ああ、変態の事か・・・もう会わないだろうから忘れてた。」

『何かの手違い』ねえ・・・

「運命の彼に会いたいんだけど、何処に居るか知らない？」

・・・

「それに、何もしてないでしょうね？私の彼に」

女は頬を上気させながら、会ってまだ数時間の男の事を語っている。

「・・・マズいぞ・・・噴き出しそうだ・・・」

人気アイドルが鼻糞ターザンで堪違いの愛を語るとか・・・腹筋が擦れて死にそうだ。

見ていて可哀想だったので、変態の居場所だけ教えてやった。

4と0・5625話(後書き)

ユウがドンドン悪い子になっていく・・・

そろそろ暴走してきた・・・

あ、あれだ！ユウは小悪魔なヒロインと言う事で・・・

4と0・765625話(前書き)

湯けむり編ももうすぐ終わりだあゝ

早く妹出したいなあゝ

俺は今、布団の中にいる。時間は朝の8時半位だろう。遅すぎず、早すぎない起床時間だ。身体も日々の疲れは捕れ快調だ。しかし、問題が1つ・・・何で俺、ローション塗れなの？  
・・・いや、何でかは分かっている。分かっているんだが・・・

変態に連れ……拉致られてここに来たのは一昨日の事。そして、偶然とほんの少しの故意が重なり合って、旅行初日、変態を隔離する事に成功した。

変態がいなくなり、俺は平穩をエンジョイしていると新たな害悪が現れた。

そいつは俺の食事に剃刀の刃を混ぜ、俺の部屋のトイレのウォッシュレットを熱湯にし、俺の部屋に火の付いた七輪を仕掛け、俺の部屋だけの電気、水、その他諸々のパイプラインを切断し、俺の衣類にアンモニアを染み込ませる（ドコで手に入れた！）。一歩間違えれば死ぬであろう。が、なんともアホなトラップを仕掛けてくる。

そいつの名は、そう！ターザ……間違えた。岸 藍子だ！

一昨日、変態の所へ行き、見事に玉砕してきた。

え？何で知ってるかって？そりゃ勿論、面白そうだったからこそそり後を付けたんだよ。爆笑しすぎてばれてしまった……玉砕した後……

そして、理不尽な事に怒りの矛先を俺に向けてきたのだ。全く……相部屋の人間が死んだ直後だったのに……不謹慎な！

今まで変態にフられて、俺に八つ当たりしてきた奴（男女両方）は  
たくさんにいた。

そして、どうせ今回も適当にあしらえば懲りて諦めるだろうと高を  
括っていた。

その日の夜、もう寝ようと思い部屋に向かっていると岸 藍子は刃  
渡り20センチ程の包丁を手に飛びかかってきた。溜息を付きなが  
ら適当に去して肘と肩の関節を固め、動きを封じて包丁を奪い取っ  
た。

……いや、奪い取ろうとした。包丁に手を伸ばした瞬間……何故か  
足元にあったバナナの皮で足を滑らせたのだ（そんなバナナ!!）。  
崩した体制を立て直そうと腕を動かすと、その先に包丁があった。  
手の平に鋭い痛みが走る。見てみると傷は深くないようだが、運悪  
く動脈を切ってしまったようだ。大量の血が溢れ出る。痛みを無視  
して包丁を取り、身の安全を確認して一息付く。ふと、岸 藍子を見  
ると目を見開いて一心に俺の『眼』を見つめ、唇が細かく震えて  
いた。

「ば……化け物！」

えっ？

岸 藍子は小声で呟いた。その目は驚愕と僅かな恐怖に満たされ、  
およそ真つ当な人間相手に向けられる視線ではなかった。

確かにね、刃物相手に落ち着いて対応し、なお且つ浅いとは言え斬  
られて少くない量の血を流しているのに何の動揺も見せない女子  
高生なんて『気持ち悪い』の一言に尽きるが、

幾らなんでも『化け物』は酷くない？『化け物』は  
傷つくよ？

そんな事を考えながら奪い取った包丁を持ち主に突き付けた。勿論刃の方を向けてだ。俺は柄の方を向けてやる等という優しさは持ち合わせていない。

そして、出来る限り低い、重たい声で呟いた。

「失せろ」

たちまち岸 藍子はケツに火が付いたかのように逃げ出した。

やはりこの手の輩を追い返す時はこのやり方が一番だ、等と一人得意に思っているのと10メートル程行った曲がり角で岸 藍子が突然立ち止り、身体ごと振り返り俺と向かい合った。その目には決意が宿っていた。

.....

「ヤッ！」

何故かイラッときたので手の中にあつた包丁を全力で投げつけてやった。

包丁は刃の先端を一直線に岸 藍子に向けて飛んで行く。不幸な事に包丁は当たらず、岸 藍子は慌てて角を曲がり姿が見えなくなつた。

「チッ！」

舌打ちが零れた。

片目ぐらい潰してやるうと思つたのに・・・まあ、いいか。もう寝よう・・・

部屋に入り睡魔に抗う事なく、寝入った。

そして、次の日から岸　藍子のゲリラ戦が始まった。

俺に八つ当たりしてきた今までの奴等は一度追い返すと懲りて、俺の存在を無かったモノとして変態にのみアタックするようになる。だが、この女は違った。無視するどころか俺に攻撃を続けるのだ。勿論、正面切つて向かってくる事はない。巧みに立ち回り、幾えものトラップを仕掛け、俺がジワジワと消耗していくのを影から眺めているのだ。一度、俺がトラップをなんとか避けると、物陰から「私が化け物から彼を助けだしてみせる！」なんて呟いてるのを見た。本当に質が悪い。てか、怖い！

肉体的には問題無い。トラップを察知し、避ける事は出来る。

しかし、精神的にはマズい。普段から変態のせいで疲弊している精神がこの旅行で癒せると思っていたのに、このゲリラ戦で更に痛めつけられる。

2日目等は『リラックス』なんて言葉を1ミリも体现する事が出来なかった。

そして、現在に至る。

ローション塗れの布団の中は気持ちが悪いので外に出て、ローションを流すため備え付けのシャワーに向かう。

お湯を出そうと蛇口を回そうとして手が止まる。

シャワーが・・・重い・・・？・・・何で？



・・・・・・・・！！

突然閃き、シャワーの首を開けて見る。

そこには白い粉が大量に詰め込まれていた。その白い粉をよく見ると『石灰』だった。

危なかった・・・

・石灰？成分の殆どがカルシウムで出来ていて、主に生石灰と消石灰の2種類に分けられる。

多分これは生石灰の方だろう。何故なら生石灰は水に反応して高熱を発生させるのだ。もし俺が何も気付かず蛇口を回していたらシャワーから出てきたのは、お湯などと言う温いモノではなくっていただろう。あの女のしそうな事だ。

なんとか石灰を取り除き、ローションを流す。

気が付けば3連休も、もう最終日

今日の午後にはここを出なければならぬ。あと半日耐えれば終わる。変態を残してここを去る事が出来る。もう岸 藍子の嫌がらせを受ける事もなくなる。

・・・・・・・・しかし・・・それでいいのか？このまま、ここを去るという事は岸 藍子から逃げると言う事になるんじゃないのか？俺、自ら負けを認める事になるんじゃないのか？

ダメだ！！許せん、そんな事！！この3日間に受けた精神的苦痛、俺の旅行を台無しにしてくれたケジメをちゃんと付けなければ！！

だが、どうする？ただ殴り倒すんでは気が済まない。それに、ここには刑事さん（妻）がいる。そんなことしたら俺が傷害罪でしょっ引かれ兼ねない。

・・・ん？刑事さん（妻）？しょっ引く？

・・・ニヤッ

良い事思いついた。

4と 0・765625話（後書き）

ああ〜頭痛ーい、喉痛ーい、鼻水ウザーい!!

と言う事で体調最悪なんで投稿が遅れました。月曜の時点で殆ど出来たのに……

明日からバイトが入るんで少し遅くなるかと思えます。

が！俺のお金の為と思って許して下さい。お願いします。

4と0・87890625話(前書き)

本当に申し訳ない。

まさか、1週間も間があくなんて・・・

ごめんなさい。

…ガサツ……ガサガサ…

…よし、これをここに隠して……うん、上出来だな。

俺が復讐を決意して約3時間、警察手帳のおかげで準備は面白い様に進んでいく。

えっ？それどうしたのかった？借りたんだよ、刑事さん（妻）に。勿論、無断借用なんかではない。果てしなく悩んだ末に変態に借りて来るよう命令したら、すんなり借りて戻ってきた。俺が貸してくれって言ったら

「これは警察官としての誇りです！そんな事、出来る訳ないでしょー！」

なんて延々と説教してきやがったくせに！

まあ、それは置いて……

警察手帳の写真を俺にすり替えたので、もう自由に使いたい放題！有料施設を殆ど『鑑識調査』という名の下タダで満喫したり、売店から『押収』という名目で色々と掻っ攫って来たり、『荷物検査』と称して客の財布から万札を抜き取ったり……

人生バラ色だね！

こんな事をしていたら、あっと言う間に2時間半が過ぎてしまった。急いで準備を始めた。

只今11時30分

家までどのくらいの距離があるのかは分からないが、1時にはここを出た方がいいだろう。と、なると残り時間は1時間半、なんとかなるだろう。フロントに電話して、国家権力を使い強制的に食堂に人を集めてもらった。

30分後

集まった人でざわつく旅館の食堂

「ゴホンッ……あゝ皆さん！静粛に願います。」

集まった人々の前で全員に向かって声を掛ける。騒がしかった食堂が段々と静かになっていく。あらかじめ許可を取っていたので遠慮なく便所スリッパで乗っているテーブルの上（国家権力万歳！！一度やってみたかった！）からは色々な顔がこちらを見ているのが分かる。

そこには、この旅館の女将さんである芳枝さんや、旅館の従業員の方々、初日にすれ違い温泉でトラウマを作った数人の女子大生、畑チヨ教子や岸 藍子と相部屋だった…名前なんだっけ？……そう！丁セキユン世均だ！ナ二人？それにその他のよく知らない客と浮浪者……

！！！！！！！！！！

思わず二度見した。刑事さん（夫）だ！

髪はボサボサで、手入れが行き届いていた渋いチョビ髭はただの無

精髭に、こけた頬には垢が溜まり、服はもはや『ボロ』と言った方が近い。そして一番変わっていたのは目だった。前は温厚そうな色を湛えていたのに、今ではギラギラと生きる事に必死な目になっていた。どうやら、ついさっき生還してきたようだ。

その刑事さん（夫）の動きが突然鈍くなった。視線はずっと同じ所を見つめている。その視線の向こうにいるのは最愛の妻、その人だった。刑事さん（夫）の顔に喜びが溢れ出す。ギラギラしていた目も元の優しそうな目に戻っていく。再会を喜び合おうと駆け寄り何か話しかけた。

「敏子（刑事さん（妻））！ 会いたかった！！ ずっと心配を掛けてすま…な……」

話す掛けている刑事さん（夫）の顔色がだんだんと変わっていく…  
…絶望の色に……

それもその筈  
当の刑事さん（妻）が無反応なのだ。いや、正確に言うなら声は聞こえているようだが、目の焦点が合っていない。しかも、声の主が自分の夫だという事も分かっていないようで、ただただ戸惑っている。

それでも話し続ける刑事さん（夫）。  
しかし、刑事さん（妻）が

「幻聴が聴こえる。馴れ馴れしく『敏子』って呼んでくる。凄く自己意識過剰な事言ってる……私はあなただけのモノなのに……」

と横にいる男の腕を抱きながら言う発言に言葉を無くしている。  
更に追い撃ちを掛けるように刑事さん（妻）が

「怖いわ……」

と言いつつ、横にいる男の胸に顔を埋める。

それを見て刑事さん（夫）はついに壊れた。その場に膝から崩れ落ち、立ち膝状態で魚のように口をパクパクし、目は全ての色を無くして何処にも焦点を合わせていない。

最愛の妻と生きて再会するために必死で戻ってきたというのに……  
……哀れだ……可哀想過ぎて涙が出そう……

ホロリ

視界が滲み、気付いた時には1滴の雫が目から溢れ出た……  
欠伸と一緒に……いかんいかん、少々周りの目が冷たくなっている。

うん。正直、刑事さん（夫）がどうなるうとどーでもいーね！

俺を見る目の中には憎き敵、岸 藍子の目もある。……ウゼエ！

「皆さんに集まってもらったのは、他でもありません。先日温泉で起こった殺人事件を今、ここで解き明かして見せましょう。」

声、高々と宣言すると再び周りが騒がしくなった。

さあ、復讐の始まりだ……！

そして、もう一人。ここから見える顔がある。

悪魔のような刑事さん（妻）の横にいる男



この先一生見ないつもりだった奴  
悲しい事に今から行う復讐の最重要カード

変態だ

・・・出してしまった・・・折角閉じ込めたつてのに・・・

復讐を完遂するためにはどうしても変態が必要だった。

当初の計画では変態を出さないため、変態を隔離した部屋で事件解放を行う予定だった……のだが、問題が生じた。警察手帳を借りに部屋に向かうと……

……何というか……まあ……（一方的な）愛の巣（18禁）状態だった

……

知ってる？ホテルや旅館の部屋つて、あくまでも借りてるだけだから勝手に装飾とかしちゃいけないんだよ。三角木馬の設置なんてもつての外！それなのに・・・それなのに！

・・・何があつたかは想像したくない。あの部屋はもう使えないだろう・・・いくら改装してもあの臭いは落ちそうにない・・・  
あ・・・女将さんが使うか！

どちらにせよ、変態と刑事さん（妻）を一緒にした俺の責任だろう。申し訳ないから取り外し（何をかは聞かないでくれ）にかかる費用位は（変態の金で）負担してやろう。

こんな状態では人を集めた時点で刑事さん（妻）の命の安全を保障できない。形振り構わずに殺しにかかりそうな人が軽く2桁は思い浮かぶ・・・

普段ならどうなるかと構わない。てか、面白そうだからむしろ率先して人を呼ぶのだが……今は困る。刑事さん（妻）も復讐のためには必要な駒なのだから……仕方なく変態を部屋から出したのである。

「単刀直入に云うと犯人はここの中にいます。」

更に騒がしくなる食堂

「犯人は……………」

途端に静かになる

……………

タメ過ぎ?

「お前だ!!!!」「バチンツ!!!」岸 あい……………」

突然、食堂に鋭い破裂音が響く。そして、2回、3回と続いていく。

さつきまで静かだったせいもあり、かなり大きく聞こえた。人々は俺の推理ショーの事を忘れて、突然響いた破裂音に視線が集中する。そんな中、犯人に指名された本人は……全く意に介していない。

俺に犯罪者扱いされた事よりも、刑事さん（妻）が変態の腕に抱きついてる事の方が重大なようだ。

二人とも互いを罵倒しながらフルスイングで叩き合っている。聞く人間を自殺に導くような会話（？）だ。現にそばにいる男の子の目が死んだ魚のようになってピクリとも動いていない。

そして、カツコよく人差し指を伸ばして言った犯人指名宣言を無視され、放置プレイを受けている俺はと言うと……

トリヤツ

イラッときたので、五月蠅い発情期の雌犬2匹に向かって便所サンダルを投げつけてやった。

便所サンダルは綺麗な弧……ではなく、重力を無視するような直線を描きながらふたりも顔面に（サンダルの裏のバッチい面が）直撃した。

サンダルの衝突音と共に破裂音と二つの罵声が止んだ。

再び静寂が食堂に宿る。しかし、その静寂も起き上ったアホ共によつてすぐに破られる。

標的を俺に換えて先ほどまでの罵声を浴びせてくる。

更にイラッときたので、今度は椅子を投げようと手を伸ばすと、変態が近付いてきた。珍しく怒っている。

変態はアホで変態だが、基本的に寛容な性格をしている。だから、

変態の怒っている所なんて出会ってから数える程しか見た事がない。先程までキャンキャン騒いでいた2匹の雌犬は変態の顔を見た途端静かになった。そのまま二人して土下座を始めた。見下しながら「ザマあゝ」とか思っていると、周りの視線が自分に集中している事に気が付いた。全員が何かを期待するような目でこちらを見ている。

「ゴホン……あー……畑 教子を殺した犯人は、お前だ、岸 藍子」

一度目は勢いで出来たが、二度目は恥ずいのでかなり適当だ……。それでも、食堂中がどよめく。

「……ホントに誰一人聞いてなかったのかよ……一人凹んでいると、土下座をしていた二人が突然顔を上げて突っ掛かってきた。」

「はぁ？何言ってるの？何で私が教子を殺さなくちゃいけないワケ？冗談じゃないわ！」

「一体どういう事ですか？何を根拠に彼女を犯人だと言ってるんですか？説明してください。てか、その前に手帳を返しなさい！」

二人が同時に喚き立てるが無視して話を続ける。

「目撃者が出ました。犯人が教子さんに睡眠薬を飲ませる所を見ていたと言つ人が出てきたのです。」

「え！！！！？？？……で、でもそんな証言私が調べた時には……」

・？」

「その目撃者は被害者とも加害者とも親しかったため、言いだせずにいたのです。それでも勇気を振り絞って私に教えてくれたのです。さあ、出てきてください。丁 世均さん」

「えっ??？」

全く違う場所で声が上がる。そちらを見ると疑問符を浮かべた丁世均がいた。今のタイミングで自分が出てくるなんて予想もしてなかったようだ。

それもその筈、彼女はそんな目撃証言なんてしてない。俺がいきなり無茶ブリをしたただけだ。

そんな無茶ブリに着いて行けず、フリーズ状態に陥り、呼ばれたので無意識にこちらに向かってくる丁 世均

そんな丁 世均に困惑した表情を向ける岸 藍子

今更、旦那が壊れた事に気付き慌てて解放し始める刑事さん（妻）  
急な超展開に付いて行けず呆然とする観衆

よし、いい感じに全員が状況を理解できなくなり始めている。

丁 世均が到着し、ようやくフリーズが解けたらしく俺に何か言おうとする。が、俺はそれを言わせない。横にあった変態の顔を掴んで丁 世均の前に突き出した。途端に丁 世均の表情が呆けた。しゃべろうとしたのも忘れ、変態の顔を見つめ続ける。

これぞ変態マジック其1『強奪』

五月蠅い雌はこうしとけば静かになる。

「あなたは、岸 藍子さんが畑 教子さんに睡眠薬飲ませて温泉に連れて行ったのを目撃した。そうですね？」

「はい……」

「なっ！チヨウウ！！何でたらめ言ってるのよ!？」

俺の質問に丁 世均は一瞬の迷いも見せずに答える。

これが変態マジック其2『強制肯定』

其1の状態にする質問は全て肯定で帰ってくる。

全く身に覚えのない罪に、友人の訳の分からない言動、段々と冷たくなっていく周囲の視線で岸 藍子は見ている可哀想なぐらいテンパっている。半泣き状態で周囲に自分の無罪を訴えているが誰も取り合おうとせず、むしろ少しずつ距離が空いて行く。

……  
……ヤバい……楽しくなってきた

岸 藍子が騒いでいるのを尻目に、ポケットから透明な袋に入った白い粉を取り出し、そしてそれを掲げる。

「丁 世均さんの証言をもとに彼女の周囲を調査した結果、この睡眠薬がゴミ箱の中から発見されました。」

勿論、ウン

俺がゴミ荒らしなんてすると思う？ヨユーで自己調達だから

だが観衆はこれを信じ、もはや岸 藍子は周囲から完全に孤立して

いる。

それでも岸 藍子は必死に無罪を周囲に訴えている。  
その時、

コッソ

岸 藍子に1つの缶が投げつけられ、それをきっかけにリンチが始まった。

全員が罵倒し、何かを投げつけている。そんな中、岸 藍子は頭を抱えてうずくまっている。

・・・・・・・・ヤバい・・・・チョー楽しい！

知ってる？今の日本に描いて最も力のある証拠って何か？  
それは・・・

変態の頭を掴み、人混みをかき分けて岸 藍子のもとに向かう。

岸 藍子は俺が向かってくるのに気が付くと、目に殺気を宿らせて跳びかかってきた。

が、それを難なく躲し変態の顔を突き付けた。途端に動きを止める  
岸 藍子

そして、尋ねる。

「畑 教子さんを殺したのは、あなたですね？」

Yes! 告白だ!!

次の日の新聞の見出しは

『湯煙り殺人事件、犯人は超人気アイドル!!??』  
だった。



4と0・87890625話(後書き)

もはや、悪い子レベルではないですね・・・

次は『引つたくり編』

新キャラ登場！

バイトの合間を縫って出来るだけ早く投稿します。

## 5話（前書き）

『引ったくり編』にはまだ入ってないです。

次です！次で入ります！！

## 5話

全く休む事のできない3連休を過ごし、平日の素晴らしさというものを初めて実感した月曜日

初夏の気持ちのいい空気を大きく吸い込み、周囲を見渡す。

横には変態、後ろには取巻き、俺には視（死）線、前を向けば飛んでくるナイフ

……前言撤回。どっちでも同じ。

変態の腕を引いて盾代わりにし、難を逃れる。

グサッ

変態が崩れるように倒れる。

しかし、それを無視して続けざまにナイフが飛んでくる。

グサッ、グサグサグサグサッ

仕方ないので倒れた変態の首根っこを掴んで前に突き出し、ナイフの雨から身を守りながら前進する。遅刻なんて真平ご免だ。

しばらくすると手持ちのナイフが切れたのだろう、ナイフの雨が止んだ。

聴こえた音から推測するに、54本位だろう。今日は多めだな……雨が止めば傘はいらない。こんな重い（約65キロ）のなんて尚更だ。と言う事で通行人の邪魔にならないよう道路わきの、都合よくあった犬の糞の上に傘（変態）を捨てた。

これで可哀想に犬の糞を踏んでしまっどジっ子を一人助ける事が出来た。良い事したなあ〜

「ねえ〜、知ってた？今日、ウチのクラスに転校生が来るんだって」

小走りで追い付いてくる変態

.....

「チツ！」

今度こそ死んだと思ったのに！！

横に並んだ変態を見ると制服に所々破れた個所があるが、血の跡が全くない。後ろを振り返ると刃先に血の付いたナイフが大量に散乱している。その数、54本・・・刺さったのは確実のようだ。

コイツ・・・段々人間の領域から離れてきたなあ・・・

しかし、それ以上に異常なのは周りだ。仮にも人一人がナイフでメッタ刺しにされてるのに全く気にしないなんて！・・・等と言うツッコミをした奴は全然分かっていない。

人間の順能力は凄まじいモノだ。そのよい例は変態だ。毎日起こっている事なのだから一々騒ぎたてるのは面倒。面倒な事はしようとしなのが人間だ。もし、そんな奴がいたとしたら間違いない。そのいつの脳は正常に稼働していない。

「た、大我さまあ〜、ごめんなさい。私が下手なばかりに、また

大切な（私の）大我様の御身体に傷を・・・」

・・・いたよ・・・脳に不備のある奴が・・・

駆け寄ってきたのは、栗色の長い髪を後ろで緩く束ねた垂れ目のそれなりに可愛い『が』幼稚園児並みに小さいクラスメイト。俺から言えば、兎に角鬱陶しい奴。

・堂地 響どうちひびき

変態信仰の第一人者で銃刀法違反の常習犯・・・かくゆう今もその手には54本の血の付いたナイフ。後ろを見ても潰れた犬の糞以外には何も落ちていない。・・・どうやったの？

一人頭を悩ませていると視界の端にキラリと光るモノが見えた。

ヒュンッ

本能的に足を止めると目先1センチの所をナイフが飛んで行った。

・・・またですか？

飛んできた方向を見ると、変態の影に隠れて頬を膨らまし、垂れた目で一生懸命に睨んでくるドチビ（どうちひびき）。その様は、まるで口いっぱいを含んだドングリを守ろうと威嚇してくるリスのよう・・・

かぁーわいー？

ドチビは唯一何回も正面切って攻撃してくる。



それはどうでもいいのだが、警察がなあゝ・・・  
事情聴取ぐらいいは受けないといけないだろう  
確か刑事さん（妻）は捜査一課所属だとか言ってたし・・・  
会いたくない・・・かなりめんどくさい・・・嫌だなあゝ

周りを見ると朝の時間という事で人は多いが、その全員が女性・・・  
多分全員変態の出待ち（？）だろう。

・・・閃いた！

俺は変態の頭を掴み声を張り上げる。

「はい！皆さん！！ちゅゝもゝく！！！！」

視線が集中する。そんな中、掴んでいた変態の頭を掲げる。

変態マジック其3『消去』

一定範囲にいる雌の任意の記憶を消す。

翌日、隣の隣のクラスは重たい雰囲気にもまれていた。

・・・  
・・・  
オレハナンニモシラナイ



## 5話（後書き）

・・・何これ？

タイトル、全く関係なくネ？

何故ジャンルが『推理』？

今更思い始めた・・・

バイト終わったんで少しは早くなると思いますb

## 6話(前書き)

『引ったくり編』突入!!

ついに妹『ツラ』登場!

## 6話

ガチャ

バラバラバラバラ

.....

嘆かわしい事に通り魔によって隣の隣のクラスの女生徒が刺殺され、その葬式が昨日行われた。その事を学校に行く途中で変態に聞いた。嘲笑ってやりたかったので、葬式に行うとしたが俺にだけ連絡網が回って来なかった。  
クソッ!!

悔しがりつつ学校に着き、下駄箱を開けると中から大量の剃刀の刃が出てきた。そしてそれに混じって少量の手紙が入っていた。ざつと20通ほど.....

えっ？少量じゃないって？

20通が少量に見えるほど大量の刃が入ってたんだよ!!

中に入ってる画鋏を落とす事を忘れずに、上履きに履き替えながらチラリと落ちた手紙に目を走らせる。

6割程あきらかに血で書いたとしか思えないような文字で表書きされていた。残りの4割は丁寧だが何処かムサイ香りのする手紙だった。

………気持ち悪い……

何事もなかったかの様に教室に向かって歩き出す。あの手の手紙はどちらも気にしてはいけない。回収するなんてもつての外、マジマジと見る事すらない方がよい。そうしようモノなら、(二つの意味で)勘違いしたアホ共が際限無く絡んでくる事になるからだ。

教室に着くと変態が、隣のクラスのくせにさも当然のように一緒に入ってきた。とりあえず無視

俺の席は廊下側の端の列の後ろから2番目。席に着き鞆から荷物を出していると、またも当然のように隣の席に座り荷物の整理を始める変態。もう一度言うが、変態は隣のクラスだ。余分な席が用意されている訳もなく、通常なら席の主から苦情が来るはずである。しかし周りは全くの無反応(黄色い声や、怨嗟の呟きはあるが……)。  
。それもその筈、俺の隣の奴は不登校だ。

………俺は何もしてないぞ

確かに、クラスメイトを不登校に追い込んだ事なんて数え切れないほどある。

後ろから消しカス投げてきた奴には、消しカスを作らなくて済むようそいつの私物全てを消しカス塗れにしてやったし、チラチラこつちを見てくる奴は、一生忘れられない様な思い出トラウマを作ったりもした。俺、優しくね？

しかし、今回は違う。

そもそも隣の奴に会った事がない。初めから不登校だった。

とは言ってもコイツが来たのはついこの間、通り魔によって無残にも隣の隣のクラスの女生徒が殺された日だ。あくまでも通り魔によつてだ。

名前は確か……………

……………

……思い出せない……………別に困らないか！

無事学校が終わり、一日の鬱憤を晴らすために変態を線路に突き落として（後方から衝突音と断末魔の叫び声と悲鳴が聴こえてきたので）満足し、家に帰る。

ガチャ

「ただい……………」

ボタン

クルリ

……………マズイ……………

玄関のドアを開け、中に入ろうとするとゾクリとする程の冷気を感じ、正面を見た瞬間  
ドアを閉めて踵を返した。そのままその場で蹲り頭を抱えて悩んでいると、後ろでドアの開く音がした。

恐る恐る振り返るとそこには、セーラー服を着て、結んでいない長い黒髪の少女が立っていた。目の高さに合わせて綺麗に切りそろえられた前髪、日本人らしい白い肌、大きくはないがスラリとした四肢。

全てのパーツが日本人らしいのに、調和しあって日本人離れたように見える少女。まるで日本人形のような・・・

「た、ただいま・・・どう、したんだ、ツラ？」

引きつりながら声を掛ける。

そう、そこに立っているのは妹のツラ（坂咲 蕩）だ。

その眼は冷たく無機質で、その表情からは何の感情も読み取る事ができない。本物の人形のように・・・

・・・・怒ってる・・・

「何の事です？むしろ兄さんの方がどうしたんですか？」

抑揚のない機会音の様な声

絶対怒ってる！！

「いや、何でないでもないです。」

自然と敬語になる。

普段から表情や感情に乏しい妹だが、他人に寒気を感じさせるほど無表情無感情ではない。

何が起こったのかは知らないが、こんな状態のツラとは一緒にいたくない。てか、一緒にいてはいけない。

怒ったツラは周りにいる人間の心を押し折り、絶望で満たす。強制的に自殺の道を歩ませる。それは俺とて例外ではない。唯一の例外と言えばアホの変態ぐらいである。ゴキブリに『自殺』という言葉が通じないのと同じように変態にも通じないのだ。

兎に角、こうなったら事が治まるまではツラには近寄らず、やり過ぎるのが最良の手段だ。大抵の場合、近隣で行方不明者が出ると怒りの治まった合図だ。

しかし、さっきツラは玄関にいた。何をする訳でもなく、ただただ待っていた。

誰を？

両親は死んだ（事を願っている）、この家に帰ってくる人物は俺しかいない。つまり俺に用がある事になる。

「でしたら、そんな所にいないで入ったらどうです？」

確定だ。ツラは俺に用がある。

ツラは俺が逃げようと足を踏み出そうとした瞬間に声を掛けてきた。タイミングを謀ったとしか考えられない。

それに、最後に『？』が付いているのに命令型になってるんだもん！！

俺に反抗など出来る筈もなく、半強制的に玄関をくぐらされる。

……せめて遺言は書かせて下さい。

## 6話（後書き）

ツラ強過ぎね？

てか、それ以上にグダグダになってる気が・・・

『引ったくり編』ってセンスねえー！！



6と2の - 1乗話(前書き)

前回はすみませんでした。

グツダグツダの内容になってしましって・・・

今回はマトモだと思えます。

ホントにすみませんでした。

## 6と2の - 1 乗話

平日の朝11時

普段なら学校の屋上で競馬の中継を聞くか、教室で教師相手に教科書の切れ端を投げつけている筈なのに・・・

俺が今いるのは、駅前の…何というか…まあ…子供を絶対に連れて来てはいけない通り、とだけ言っておこう。

左を見ると派手な外装をした、泊まる事を目的としないホテルが、右を見ると子供は使っちゃいけないおもちゃ屋さんが、

そして、前を見ると黒スーツにグラサン掛けて、片手に看板持ったイカツいおっさんがいる。

看板には

『只今、タイムセール中！！5000円で1時間自主規制\*\*\*\*\*放題！  
！道具使用可！

制服、ナースにメイド、はたまた巫女さんまで！何でもいるよ！！  
も、もつと規制×××を×××××て×××××してえ〜！！』  
と書かれている。

………ちよつとだけ……

身体が勝手に吸い寄せられそうになるが、横にいるドチビの冷たい視線で自制を掛ける。

ゴホン……

何故、俺がここにいるのかと言つと……

〈回想〉

家に入り、しばらくするとツラに居間まで来てほしいと、器用な事に申し訳なさそうな態度で命令してきた。俺に断る理由も（度胸も）無く、ツラに言われるがまま床に座<sup>フローリン座</sup>った。ちなみに、ウチは一般的と言っているいい内装で居間にはソファも絨毯もある。

ツラは正面のソファに座り頭ごと身体を背もたれにあずける。そのまま目を瞑り大きく息を吐き出すと、瞼を少し開けて目だけを動かしこちらを見る。<sup>見下す</sup>ゴミを見るときの方がまだ温か味があるのではないかと思うほど蔑みに満ちた視線だった。

俯き、身体を縮こまらせながらツラがこれ程まで怒っている理由を探す。

心当たりがない・・・

一人悶々としてみると、ツラが目を閉じ、体を起して背もたれから離れる。背筋を伸ばし綺麗な足を組みながら姿勢を正す。両手を膝の上で合わせると微笑みながら話しかけてきた、視線の冷たさはそのままに・・・

「兄さん、最近近所で引ったくり通り魔が出没しているのは知っていますよね？」

・・・ナニソレ・・・？

何の事だが全く分からずポカンとしてみると、ツラが「もう死ねば？」的な視線で説明してくれた。

「犯行は学校帰りの中・高校生を対象に、引ったくりがこの1週間

で50件近く発生しています。犯人はいずれもフルフェイスのヘルメットを被った175〜9センチ程の人物だそうです。性別は特定されていません。

そして、3日前起こった女子高生通り魔殺害事件も被害者の身ぐるみが剥がされていたので、同一犯による犯行だと思われています。しかし、この犯人の殺人、又は傷害などの通り魔的犯行で確認されているのはこの1件だけです。

・・・確か、被害者の女子高生は兄さんと同じ学校の同い年だった筈ですが？」

いつの間にかツラの視線は「もう死ねば？」的なモノから「もう死ねよ」的なモノになっていた。

にしても・・・3日前？・・・3日前、3日前・・・3日前！？

手を上げて発言許可を求める。

「何ですか、兄さん？」

「あー・・・その被害者って・・・？」

「ニユースではプライバシーの関係で詳しい事は何にも・・・。あつ、でも聞いた話ではB組らしいですよ？」

・・・俺はD組、隣の隣のクラスはB組。んでもって被害者はB組。ドチビのナイフが知らない女生徒に刺さったのは3日前、被害者が通り魔に襲われたのは3日前。俺は死人に荷物は必要ないという事でその女生徒の身ぐるみを回収した、被害者の身ぐるみは剥がれていた・・・

「……オレハナンニモシラナイ……」

「……何にも知らないが、引ったくり通り魔さん、ゴメンナサイ。」

「それが何か？」

「いや、なんでもないです」

突然焦り出した俺を見てツラの視線は「早く死ねよ」的なものになっている。

その視線に更に身を縮こまらせていると、ある事に気付いた。

大抵、居間か食卓に放置されている筈のツラのスクールバックが見当たらない。

まさか……

再び手を上げて発言許可を求める。

「何です？」

「ツラ……お前、荷物は……？」

質問した途端、居間の温度が5 位下がった様に感じた。更にツラの視線は今までのどれよりも冷たくなっている。しかし、それは俺ではなく、他の何かに向けられていた。

「……兄さん、明日暇ですよね？」

「いや……学校が……」

「生け捕りにして、連れて来て下さい、明日中に。まさか、可愛い妹の頼み<sup>命令</sup>を断つたりしませんよね？」

.....

## 6と2の - 1 乗話 (後書き)

名前も変えて心機一転

まともなモノにするため、

これからは週1ペースで投稿していこうと思います。

今までよりは遅くなると思います。ご了承ください・・・

6と4の - 1乗話 (前書き)

すこゝしだけ遅くなりました。



## 6と4の - 1 乗話

「ねえ、ユウ！！あそこ、あそこ入る！！」

騒ぐ変態の指さす先にはピンクの照明でライトアップされ、

『体育倉庫を完全再現！！埃っぽい室内、汗臭いマット。あの快感を今ここに！！』

と書かれた看板をデカでかと掲げたお城の外観をした建物が・・・

ドスッ

とりあえず、フリーキック感覚で変態のナニを蹴る。前屈みになり悶絶する変態、更に追い撃ちを掛けようとするが横から飛んできたナイフに攻撃を止める。

チッ

ドチビだ。

こいつら二人は頼んでもいないのに勝手に付いて来た。いや、むしろ会つと色々とメンドそうだったので、避けていたのだが・・・

クソッ！！まさか、あの落ちていたエロ本が変態の罠だったとは！！

んで、変態に見つかり、芋づる式にドチビも付いてくる事になり、今に至ると言う訳だ。

にしても、この通りは流石にソッチ系の店が多過ぎないか？

周りは360度、何処を見ても18禁だ。

べつ別に、すぐく下ネタに興味があるがキャラ的に似合わなくて学校では興味無いふり、更に家では妹のせいでエロ本1つ置けない、果てしなく欲求不満な思春期の頭ん中『お花畑のようでそんなに和やかでなくてグチヨグチヨとかネチヨネチヨ』とかいう感じの健全な少年の欲望を満たすためにこんな通りにいる訳ではない。

ホントだよ！

ツラに買いたしもし一緒に頼まれたのだ。

確か買ってくるのは・・・

ポケットの中のメモをひろげる。

・ムチ（出来るだけ棘がたくさん付いているヤツ。キャット・オブ・ナイン・テイルが理想）

・手錠×4

・口枷

・鼻フック

・麻縄

・三角木馬

・重り（10キロ以上）×2

・注射器（特大）

・アタツシユケース（人一人をバラバラにすればなんとか入るくらい  
の大きさで、かつ何処にでもありそうなモノ）

小さく几帳面な字で書かれている。間違いなくツラの書いた文字だ。

アハハハハ…オニイチャン、ツラガナニカンガエテルンダカマツタ  
クワカラナイナアゝ

ドコカリヨコウニデモイクノカナア。タトエバ、フジノジユカイニ  
デモ………

アハ…アハハハハ…ハ………何でこんな子に育っちゃたんだろう？

ドン

一人ツラの将来を危ぶんでいると何かがぶつかってきた。

それはデカくて、厳つくて、坊主で、高級そうな黒スーツに派手な  
アロハシャツで、金時計で、金ネックレスで、顔刺青で、社会的に  
生きていくのが大変そうなモノだった。

つまり、

パツと見ヤクザ、ジツと見ヤーさん、悪く見て極道、良く見て…  
チンピラ？

結論？社会不適合者



「・・・50万」

顔を近づけてきた社会不適合者其2に睨み返しながら呟く。

「あ、あ？」

「慰謝料。肉体的かつ精神的苦痛に対する慰謝料として50万程寄こせ」

社会不適合者、其2二人揃って口を半開きにして硬直している。

「聞こえないの？早く出せよ50万。でないと訴えるよ？まあ、多分あんた達相手ならヨユーで勝てるだろうけどね」

社会不適合者其2の固まっていた表情が段々と怒りに満ちていく。そして、手を振り上げ俺の顔を叩く。俺が勢い余って地面に倒れると、社会不適合者其2は振り向いて社会不適合者其に向かって叫ぶ。

「ヤスさん！このアマ、拉致っちゃいましょうぜ！！結構な上玉ですし、組の皆で愉しんでから海外にでも売り飛ばせばかなりの金にべらー！！」

社会不適合者其2に最後まで喋らせる事なく、水面蹴りで転げさせる。社会不適合者其2が倒れるとそのまま足を掴み、膝十字固めを掛ける。

痛みで社会不適合者其2が何やら喚いているようだが・・・

「えー？何ー？聞こえないよー？」

ミシミシ

「ギブギブギブー!!」

「全く聞こえないー」

ミシミシミシッ

「ウギャアー!!ゴメンナサイ!スミマセン!!許し「フン」ギャ  
ー!!」

うん、これは正当防衛ってやつだから、

叩かれたし、

乙女の貞操の危機だったし、

うん、足折られても仕方ないよね!

膝が大分ありえない角度になった社会不適合者其2を尻目に社会不  
適合者を睨みつける

「あんたもこうなりたくなかったら、さっさと80万出しな!」

俺が挑発して構えると、額に青筋を立てた社会不適合者は上着を脱  
ぎ放り、ファイティングポーズをとって……そのまま倒れ  
た。

倒れた社会不適合者の向こうには変態がいる。ようやく悶絶から立  
ち直ったようだ。

構えたまま標的がいなくなってしまうた俺は、仕方ない?ので両足  
綺麗にそろえたドロップキックを変態の顔面に決める。

そのまま変態を一方的に攻撃していると、ようやく状況に追いつい  
てきたドチビが俺に向かってナイフを投げってくる。







6と4の - 1乗話 (後書き)

決してユウはスケベな訳ではありませんよ!!

ユウは身体は女の子でも中身は男の子なんです!しかも思春期真っ  
只中の!!

てか、ユウ・・・タチ悪っ!

でも家計(金)のためです

どうか許してあげてください・・・

6と8の - 1乗話(前書き)

次の投稿は遅くなりそうです。

テストがあるんで・・・  
ご了承ください。





おいおい、前向いて走らないと危ないぞ？  
あえて言わないけど・・・

「折角、騎手脅して大当たり確実の八百長試合だったのに！！  
数百万は確実だったのに！！

それを・・・それをテメエがツラのカバンなんか盗むから！！  
絶対捕まえて、この世の全ての苦しみを味あわせてやる！！」

もう涙で視界が歪んで前が見えないよ・・・

「ユウ・・・幾らなんギャフ！！！！？」

こちらを見ながら走り続けていた変態が電柱に衝突  
結構なスピードで走っていたので、かなり痛そうだ。

「だから、前向いて走らないと危ないって言ったのに、馬鹿な奴  
だな」

言っていない、思っただけ、思ってたけど言わなかった

でもまあ・・・変態だし・・・

「ユウウウウウ~~~~」

ものの数秒で回復して追いついてきやがった！

前を見ると引ったくり犯との距離は更につまり、あと2メートル程  
の所まで来ていた。

もうちよい・・・

手を伸ばして肩を掴もうとすると、引ったくり犯は突然右に曲がり近くの玩具屋大人のに逃げ込んだ。

小癪な！！

追いかけて俺たちも玩具屋大人のに入る。

引ったくり犯は中の商品をひっくり返しながら店の中を逃げている。玩具屋大人のの中はド○キ・ホーテを彷彿とさせるような迷路状態、なかなか追いつけず距離は開いて行く。

結局、玩具屋大人の内では捕まえられず、引ったくり犯は入ってきた扉から逃げ出して行く、左脇には俺の（？）荷物を、右脇にはオナホルを抱えて……………

「なんて奴だ！引ったくりだけでは飽き足らず、万引きまでするなんて！！こんな凶悪な犯罪者を野放しにしているはいけない！！絶対に捕まえてやる！！」

「ユウ？その手に抱えてるムチと鼻フックと三角木馬はどうしたの？」

……………

悪は許せない！！

取りあえず、ムチで変態を叩き五月蠅い口を塞ぐ。

別に、万引きぐらい大した罪になんねえんだよ！

大人の玩具屋を出て左に逃げていった引ったくり犯との距離はまた開いてしまっている。

今回はなかなか距離が縮まらない。

理由は簡単、三角木馬を持っているからだ。

重さは大した事がないが、兎に角走りずらい。三角木馬とセットの重りは持って来なくて良かった。

しかし、全く距離が縮まらないとなると、イライラしてくる。

イライライライライライライライライライライライライライ

プチンっ

「死ネエエ！！オラァ、！！」

頭の中で何かが切れる音がして、気が付くと全力でナイフを投的していた。狙いは正面にいる引ったくり犯に、高さも先程のような頭の高さではなく、確実に相手の機動力を奪う腿の高さだ。

ツラからは、『生け捕りにして連れてこい』とだけ言われているのだから、多少傷モノになっても構わないだろう。

しかし、引ったくり犯は俺の叫び声で命の危険を察知したのか、ナイフが刺さる瞬間に横に飛び、間一髪で避ける。

チツ！！

グサ

舌打ちをして悔しがっていると、何故か当たらなかった筈のナイフ

が深々と何かに食い込む音がした。

前を見ると、ナイフを避けて倒れている引ったくり犯の向こう側にド  
チビがいた。胸にナイフが深々と刺さった状態で・・・

え？

驚いていると、ドチビは音もなくその場に崩れ落ちた。



6と8の - 1 乗話 (後書き)

どうなんでしょう？

これ、完全に『推理』じゃなくね？

ジャンル変えようかどうか迷ってます。

もし変えた方が良いと思ったら連絡ください

## 6と16の・1乗(前書き)

こんにちは、

久しぶりに更新しました。かなり間が空いてしまいました。すんません。

久しぶりという事でかなり少なめになってしまいました。更に申し訳ないです。

そして、作風を少し変えてみました。次回には戻ってると思います。

ピーポー、パーポー

サイレンの音と慌ただしく行きかう人の喧騒、そして時折こちらを照らす赤いランプ  
いかにも刑事といった風貌の中年男性が状況に不釣り合いな少女と話している。

「グス、学校サボって遊んでいたら突然、変な人が現れてヒツグ、彼女を…響を刺して荷物を奪って逃げて行っただんです…うわぁぁん！私が、私が響を誘わなければ！！えーん！！」

零れ落ちようとする涙を必死でこらえ、恐怖に肩を震わせる少女の姿を見て、困った顔の刑事がハンカチを差し出ししながら聞いてくる。

「その響ちゃんを刺したヤツ、どんなだったか覚えてる？」

「ヘルメットで顔が隠れていてよく分かりませんでしたけど、背の高い人でした…」

「そ、それはどの位？」

少女がハンカチを受け取ると刑事が少し興奮した様子で顔を近づけて聞いて来た。

「170…後半位だったと思います」

「そうか…ありがとう。響ちゃんの仇はおじさん達が必ずとるよ」  
満足そうな顔でそう言うと、身を翻して周りに指示を出しながら何処かに行ってしまった。

「…帰りたくない……」

一人取り残される少女

膝を抱き、怯えて縮こまりながらそう呟く姿はあまりにも痛々しい。しかし、遠巻きに少女を眺めるだけで警官も野次馬も誰一人として少女に声を掛けようとはしない。

やがて時間が経ち、日は暮れ、少女の周りには誰もいなくなった。

何時間もの間、少女は全く動かず、ただただ虚空を眺めている。先程まで時折通った通行人もめっきり見なくなった。

カッン…カッン…

一つの足音が入通りのない暗い道路に響く。

足音の主は少女の前にたどり着くと歩みを止め、少女に向かって呟いた。

「兄さん…」

それまでぼんやりとして目の焦点の合っていなかった少女が、その声に反応して顔を上げる。

少女の前にいたのは、日本人形と見間違うほど美しい少女。たとえ同じ女性であろうと見惚れてしまいそうな容姿をしているのに少女はその少女を見た途端、顔が真っ青になり、全身に冷たい汗を流し

ながら、身体を震わせ始めた。

それでも少女はなんとか引きつりつつも笑顔を作り、震える唇で声を出した。

「よ、ようツラ・・・こ、こんな夜遅くに出歩いちゃ駄目だぞ、アハ、アハハハハ・・・」

乾いた笑い声が響く。

そんな少女にツラと呼ばれた少女は近付いて行く。

暗くて表情が読めない。

「そうですね、確かに気を付けないですね。……で、兄さん……こんなところエモノはどうしたで何を？」

ツラが進むたびに、少女は同じ分だけ下がろうとするが、後ろは壁。逃げ場はない。

それでも少女は下がろうとする。終いには足がもつれて倒れてしま  
うが、それでも少しでも距離を取ろうともがいている。

しかし、少女の抵抗虚しくツラは少女との距離を着実に詰めていく。

そして、ツラは手を伸ばし少女の頬に触れ、呟いた。

「一緒に死になが帰りましょう。」

一つの悲鳴と共に、二人の少女の姿は夜の闇に消えていった。

## 6と16の・1乗(後書き)

視点を变えて見たんですが、どうだったでしょうか？  
前書き通り、次回にはいつものユウ主観になります。  
良ければ感想など欲しいです。

6と32の・1乗(前書き)

ペース上げるって言った矢先に、長い間放置しっぱなしですんませんでした。

今度こそ週1投稿にします。変わってねえ

6と32の - 1 乗

「ツラさん？ 一体ここはどこでございましょうか？」

引ったくり犯を逃してしまい、家に帰るに帰れず途方に暮れていた所、一番会いたくなかったツラに捕まり連れてこられたのは……

「何言ってるんですか？ 慣れ親しんだ我が家以外の何物に見えると  
言っんですか」

「拷問部屋だよ！

拷問部屋以外の何物にも見えないよ！！

てかそれ以前に、我が家でレンガ造りで所々に血痕の付いた拷問具だらけの地下室なんて初めて見たよ！！」

「……………昨日早急に作らせました」

「嘘付けえ！ 床に血液染み込んで、馴染みまくってんじゃねえか！  
いつからだ！！いつからこんなモノがあつた！？」

「…まあ、それはいいとして、

私の拷問部屋（やすらぎの間）を“こんなモノ”とは失礼ですね」

俺の質問を華麗にスルーし、何やら取り出したツラ

取り出したそれは今日、俺が凶悪な犯罪者（引ったくり犯）を追い  
かけながらも、警察の事情聴取中でも、野次馬に一人囲まれても決  
して手放さなかった物      ムチと三角木馬      だ。

ツラは右手にムチを、左手に三角木馬を引きずりながらこちらに歩  
み寄って来る。



「……美しくて聡明で親愛なるツラ様？な、何をなさろうとし、してるんですか？」

「うふふふ。いえ、道具のちょっとした確認を…、せっかく兄さんが持つて来てくれたんですから、試しに使ってみないと失礼ですよっ？」

その顔には、プレゼントを貰った子供のように輝く瞳と、教会から出て来た新婦のような幸せそうな笑み。

見ているこちら方も嬉しくなるような表情……の筈なのに、恐怖と冷たい汗しか出てこないのは何故！？  
本能が逃げると告げている……

「花顔雪膚、傾城傾国、羞月閉花、容顔美麗で、博学広才、機知縦横、慧眼無双、眼光紙背な最愛なる我が妹の坂咲 蕩様、野卑滑稽な自分にそんな気遣いは無用です」

俺とツラの間は約5メートル。

よし、十分逃げ切れる距離だ。なら……

「それでは自分はこれで失礼させて「ガシッ」！！？」

出来る限り失礼のない様に部屋（拷問）を出ようと後ろを向いた途端、肩を掴まれた。

幻覚だ！これは絶対に幻覚だ！！

一瞬で足音も立てずに5メートルもの距離を移動する妹なんて俺にはいない！！孫悟空じゃあるまいし！

チラッ

……妹はヤードラット星に行った事があるようだ。

恐る恐る振り返るとそこには先程と寸分違わぬ笑みを浮かべるツラが立っていた、

「遠慮しなくて良いんですよ。楽しいのはこれからなんですから  
先程よりも狂気（喜）に満ちた瞳で。」

（5時間後）

坂咲家の地下（拷問）室には

「では明日……いえ、もう今日ですね。今日中にアレを捕まえて来て  
くださいね」

どこかツヤツヤとしたツラ

「も、もうお嫁に行けない（涙）」

色々と越えてしまった俺がいた。

「あゝ…本日は晴天なり、本日は晴天なり」

……

という事で、今日も昨日同様R18ストリートに来ている。

今日もネオンが眩しいぜっ！昼間だけどね！

何故来ているかって？

そんなの決まっている！

今日こそ引ったくり犯を捕まえて帰らないと俺は妹に貞操だけでなく、全人権を奪われる事になる。

そう…昨日の夜のように……

……思いだしたら死にたくなってきた……

「よし、ユウ！そんな所にしゃがみ込んでないで、今日こそあの店入ろう！」

もうお約束のように今日も着いて来た変態

学生の本分は勉強だぞ？ちゃんと学校行けっつてんだ、コノヤロウ

「そして真実の愛を二人で見つけヨべらっ！！」

気が付くと、勝手に身体が動いて変態の眼球を抉り出していた。

なんか横でムスカの真似してる変態が指差した先にあったのは……

『鈴木（S）と松田（M）の楽園』

うん、ホテルだね。アダルトな感じのね、うん。

麻縄で亀甲紋に縛られて、体内最終廃棄物排泄孔に蝋燭の刺さった松田（M）さんと、それを足蹴にしながら、ムチと電気マッサージ器を持った鈴木（S）さんの絵を高々と掲げてる店なんてそれぐらいしか思い浮かばないからね。

S M…拷問なんてね、消え失せればいいのにな

アハハハハ、アハハ、アハ……

……

突然視界が歪み地面に両膝を付く。

目眩がする。怪我は何処にもないのに身体の至る所が痛みだして、立ち上がろうとしても言う事をきかない。心が軋み、段々と絶望に満たされていく。

……トラウマ（昨夜の事）が……

……

……

……

……なんか……イライラしてきた……

暫く道の真ん中で打ちひしがれていると、沸々と怒りが湧き出してきた。

何で俺があんな目に会わなきゃいけないんだ？  
だからだ。

ツラが怒っ

何でツラは怒ったんだ？

ツラの物が

奪われたからだ。

誰が奪った？

引ったくり犯

だ。

全ては引ったくり犯のせい？

YES

怒りがトラウマを超えた。身体の痛みや絶望が嘘のように消え、自然に立ち上がる事が出来る。

「よし、殺そう。鼻の穴にワサビ詰め込んで、醤油の海に沈めて殺そう。いや、殺す前に体毛全剃りにして全裸で引きずりまわそう、そうしよう」

「……ユウ、オーラが黒いよ……」

変態はハンターだったようだ。

「でも、どーやって捕まえるの？オレもユウも顔知られてるけど……？」

「ふっふっふ……作戦ならある。………コイツだ!!」

俺が指差した先にあったのは……！！

## 6と32の・1乗(後書き)

引っ張ります。

コン君だって肝心なところでCM挿んだりするし……良いですよ  
ね？

次回、新キャラ登場します。多分メインキャラになります……多分……  
更に引ったくり編解決します！

出来るだけ早く頑張ります。

6と64の-1乗(前書き)

遅くなりました。すんません

オールして仕上げたんで、後半グダグダかもしんないです。  
グダグダだったら申し訳ないです。善処します。



「コイツだ!!」

「……誰？」

指差した先にいるのは、さっきからずっと一緒だったのに放置し続けた一人の少女

「あ、どうも、山田花子です」

若干頬を染めながら（変態だけに）挨拶する少女、もとい山田花子

「なんで偽名？今時、花子なんてイモい名前ある訳ないでしょ……？」

「語尾にハートつけるな、気持ち悪いわ!!」

あ、それとお前サイテーだな！花子さんに今すぐ謝れ！

黒髪御下げに眼鏡で、ただでさえ地味で、運動音痴根暗で、ウンチで、得意教科無しで、なのに国語だけほんのすこ〜しできて、休み時間は常に図書室にいそうなイモい娘なのに、名前までイモいなんて言ったら可哀想だろ!!」

「私の事はいいで!? あなたフォローする気ないでしょ!?!」

「ゴメンね、花子さん……」

申し訳なさそうに、且つ可哀想な感じで謝るヘンタイ

「全く癒されない……」

道のと真ん中で『orz』こんな感じになってるイモ子……じゃなくって花子は放置

「それでユウ、このイモ……花子さんが作戦つてどーゆー事？どこから持ってきたの??」

「大我君まで……」

「ハートの形変えんな、更にキモいわ！死ぬ！！  
それと花……イモ子はクラスメートだ？」

「なんで言い直したの！？てか何故疑問形！？  
クラスメートよ！しかもあなたの前の席！！」

「モブは一々覚ええない主義だ。そして困だ。コイツを餌に引つたくり犯をおびき出す。」

良かったなイモ子、モブキャラから駄キャラに昇格したぞ！」

「うわあ、イモ子さんスゴイ！」

「誉められてるのに、何この屈辱感！？ イモ子は確定なの!？」

「『モブキャラを餌に引つたくり犯を誘き出してミンチにしよう大作戦』開始だ！」

「結局モブキャラ!？」

「それじゃあ、まず「見つけたぞ……この糞アマア……」……あ

「あ？」

喋ろつとした途端、遮られるとイラッとするよね？

声のした方を見ると、チンピラ以上ヤクザ未満の風体をした赤髪の松葉杖を突いた男を先頭に10人程のチンピラ集団がこちらに向かって来ていた。

「よお、昨日は随分とやってくれたじゃねえか？」

赤髪の男が片足を庇いながら話しかけてくる。

どっかで見たような……？

「オメエ等、あれが例のアマだ」

「うわ！ホントに上玉」

「良いんですか、若頭？こんなにいい女の貰っちゃって？」

「ああ。しっかりと社会のルールって奴を教えてやりな」

チンピラ達はニヤニヤと下卑た視線でこちらを見る。

「おいおいイモ子、いくら一夏の淡い思い出だからってあんな質の悪い男にて出しちゃあかんだろ……」

「し、知らないわよ、あんなち、チンピラ達！それに一夏って何よ、一夏って！まだ6月じゃない！」

「あんな頭ピーマンな男共に貞操を奉げるような、そんな頭の悪い

子に育てた覚えはありません！」

「アナタは私の何！？てか奉げてないわよ……！」

「あんな社会のゴミのフンみたいな奴等でもお前みたいな何の取柄も無いイモ子が良いなんて奇特定の性癖を持ってくれてるんだ、大切にしなさい」

「言ってる事が破綻してる！？」

「因みに視点は、兄、母、父の順番だ」

「父親、最低ね！？」

「父親になんて事を「何ヨユーこいてんだテメエ等！舐めてんのか……！」……チッ」

二度目だよ……この桜木花道赤髪もどきが……丸刈りにすんぞ……

俺とイモ子が騒いでいると、業を煮やした赤髪の奴が怒鳴りつけてきた。

イモ子とのやり取りで気が付かなかったが、チンピラ達は随分と近く手を伸ばして届くか届かないかぐらいの距離まで来ていた。

「ぐへっぐへっへっへ」

「でゅふでゅふでゅふふふふ」

どーでも良いけどチンピラ達の指の動きがパない。

もはや、厭らしい手つき通り越してんだけど……軟体？触手？どう

なつてんの??

「観念したようだな。大丈夫、大人しくしてれば気持ち良くしてやるよ、ギャハハハ！」

エセ阿散井恋次がニヤニヤした顔で言い、一緒になつて周りのチンピラ達も笑う。

「……………おい、ヘンタイ……………」

「ん?何、ユウ?」

横でチンピラ達以上に異常な指の動きをしているヘンタイに声を掛け(る前にムカついたので一発殴つて)、聞く。

「誰だ?アイツ等、お前の知り合いか?」

「…………………………」

場の空気が凍る。バカみたいに笑っていた出来損ない我愛羅赤髪が笑いを止め、アホ面でこちらを見ている。

「……………ユウ、忘れたの?ほら、一昨日行ったファミレスでウェイターやつてた……………」

「ああ、あの時の「逃げえーよ!!」……………」

三度目……………もう、殺しても良いだろうか……………

啞然赤髪としていた不細工な蔵馬が我を取り戻す。

「昨日だ！昨日あんだけの事しといて忘れたとは言わせねえぞ！」

昨日？

昨日は……

「ユ、ユウ！！？」

昨日の記憶を手繰り寄せていると突然ヘンタイが掴みかかってきた。

「どーゆー事！？何したの！あんなジークフリードとヒキガエルの混合物みたいな顔したオッサンと何したの、ユウ！！ま、まさか……！」

「おい！オッサンってなんだよ！オレあまだ30だ！」

「ヒキガエルとの混合物って所は否定しないんだ……、てかそれ、十分オッサンです」

「うっ……た、確かに……で、でもせめてオジサマに……」

「うわあ……」

「ドン引きされた！？」

以上、ヘンタイと赤クロス元帥髪へチャムクレver.のクソどーでもいい会話でした。  
忘れましょう。

「で！ユウ！！何があったの！？何もないよね！？こんなギャグセ

ンス皆無のジャガーさんみたいな奴と何かがあったワケないよね！  
」？」

ヘンタイ、メンドクセエ」

「ヒキガエルとの混合物ってどーゆー意味だよ！？」

「うわっ！今更かよ！？」

引き続き、ヘンタイと……（以下略）

んで、えーと……昨日は……

家出て、犬蹴って、ヘンタイが現れて、ヘンタイぶん殴って、歓楽街に着いて、取りあえずイメクラに……は行ってないな……ゴ、ゴホン……その後引ったくり犯にあつて、ツラのお使い済ませて（万引き）、家に帰って、風呂に入って、寝た、と……

……うん、何もなかった。妹に貞操を奪われるなんて事は起こってない。そんな事実は知らない、認めない。

「うん、何もなかったぞ」

「だよね、ユウがこんな八神庵（超劣化版）と何かある訳ないよねえ」

安心したようにヘンタイが呟く。そのままサクサ紛れに抱きつこうとしてきたので、イモ子イモ子を投げつけるクラッシュで撃退した。ヘンタイに受け止められたイモ子はトランス状態になっているが、無視

「この糞アマ！！人の足、押し折っというて忘れただど！？」

「知らん。モブ、もしくは駄キャラの足を押し折る程度の事、一々覚えてないな」

名前のない奴ってモブキャラか駄キャラだよな

「っ!!」

顔を髪と同じぐらい赤く染めて全身を震わせていた赤髪の駄キャラが怒りに堪え切れず、持っていた松葉杖を振り上げた。

俺はただ黙って松葉杖で殴られるような趣味は無いので攻撃しようとする、ヘンタイが間に割り込んできた。

おっ!?

そのまま松葉杖を受け止めて、振り返った。

「ユウ、今度こそ引つたくり犯捕まえるんでしょ?ここはオレに任せ」

まさか、まさかこれは……!?

「大丈夫、この程度の奴らすぐに倒して追いつくから、オレを置いて先に行く」

死亡フラグキターーーーーー!!!!!!

「ここから先は女の子は見ちゃいけないよ。大丈夫、この程度の奴らすぐに倒して追いつくから」



おお！更なる死亡フラグ！！  
何とかして成立させなければ……

「で、でも……」

「ユウ…大好きだよ」

「……………」

よし！コイツはもう助からない。

ああ、今日はなんて良い日なんだ

俺はニヤつく顔を必死でシリアスにして、イモ子の手を引いてその場から逃げようとする。

「嬢ちゃん達、本当にここから逃げられると思ってるのかよ」

しかし、チンピラの一人が回り込み行く手を阻む、がヘンタイがそいつを殴り倒して道を開ける。

「彼女達に手は出させない！ここを通りたいならオレを倒して行くんだな！！」

イエーイ！！

これでサヨナラだな、ヘンタイ（笑）  
最後までらいちゃんと呼んでやるか……

「絶対に追いついて来いよ、泰造」

さて、ヘンタイは死んだし、新しいATMを探さないと……

「「……………」」

何故か苦笑いのヘンタイ

横にいるイモ子までもが呆れてこっちを見ている。

「何だよ……………」

あまりの不自然さに聞くと、イモ子が呆れながら答えた。

「……………彼の名前は『大我』よ……………」

……………しくった

気まずい沈黙が流れたが、それを振り払うように俺はイモ子の手を引いて走る。

しばらく走ると、人通りの少ない路地に出た。  
引ったくり犯を誘き出すため、イモ子と別れて周囲を歩きまわる。

で……………なんだ、このカオスな状況は…

イモ子が……………あの黒髪（以下略・上部参照）ないモ子が、ナンパされてる……………だと!?

別行動をしているイモ子の後ろを尾行していると、一人の男がイモ子に近付いて来てそのまま口説き始めた。

イモ子は困った様子でに男の誘いを断り続けている。しかし、男も

しつこく、終いには往来のど真ん中で土下座する始末。

ホントにいたよ……イモ子が良いとか言う、残念 奇特な趣味の男が……

男は見た感じ、歳は俺やイモ子とさほど変わらなさそうだ。趣味が可哀想 奇特なのが酷く痛々しいが、伶俐な相貌に銀縁の眼鏡を掛けた利発そうな男はスラリとした長身で、容姿がそれなりに良い。バイクも無いのにフルフェイスのヘルメットを抱えていたりと変な所もあるが、大抵の女子ならば二つ返事でOKしてしまうだろう。

しかし、状況が悪かった。ここには過程、年齢、既婚、全てを無視して女（+極一部の男）を墮とせる全男性（極一部を除く）の敵、ヘンタイがいる。そして、イモ子もヘンタイに墮ちた一人だ。ナンパはまず不可能だろう。

イモ子如きに土下座までして、断られている男を見ていて、あまりに傷まれなくなってきたので慰めてやる事嘲笑してやめにした。

「おい、イモ子。こんな所で何してんだよ？」

さも、偶々通りかかったかのように声を掛ける。顔がニヤニヤしているのは気のせいだ。

「あ、さ、坂咲！ちょうど良かった。この人が放してくれなくて……」

ヘンタイがフラグ立てた時は殺気しか向けてきたくせに、こんな時に限って頼りやがって……

まあ、別に構わないけどね、

「不束な娘ですが、どうぞ幸せにしてやってください」

この場が更にややこしくなってもいいなら……

「ちょー！！あんた何言ってるの！？それ以前に何様のつもりよ！？」

「mother's side、略してS・Mだ！」

「何よ、そのドヤ顔！無性に腹立つ！！しかも間違ってるし！！」

イモ子を適当にあしらいながら、男に目を向ける。

遠目ではインドア派のモヤシっ子に見えたが、近くで見るとそれなりに筋肉もあるようだ。髪は男子にしては少し長く、頭頂部に一本アホ毛があるが、チャームポイントと化している。所々から見える時計や財布等の小道具も全てがブランド物で、零が六つ以上つきそうな物ばかりだ。

頭脳明晰、運動神経良好、眉目秀麗、資産家子息って感じか……

一発殴ってもいいだろうか？

男は俺をマジマジと見ると、何故か少し青ざめて、汗を滲ませている。更には、あんなにしつこくイモ子に迫っていたのに帰ろうとしている。

怪しい……

男をジッと見てみると、ある物が眼に止まった。

男の持っているヘルメットだ。これと言って特徴がある訳じゃない。至って普通の型のフルフェイスメットだ。しかし、一か所だけ変な所がある。ヘルメットの後頭部、そこに何か尖った物をぶつけたような傷がある。そう、ナイフで付けたかのような傷が……

!!

不意に頭の中で全てが繋がった。

そして、同時に急激に体内にドス黒いモノが溜まっていくのを感じる。

身を翻してその場から逃げるように居なくなろうとする男の肩を掴んで引き留める。

「おい、お前もしかして引つたく「ユウーーーーー???」……………」

俺は何も聞こえなかった。

奴は死んだんだ。居る訳ない。

幻ちよ「ユウ、ユウ、ユウ、ユウ……?」「う……」

も、もう、やだ……

コイツ……何で死なねんだよ……

俺の視界に割り込んできたのは、血塗れのヘンタイだった。

全身血みどろだったが、テンションの高さから見て多分全て返り血だろう。

いつも以上にハイテンションでウザい事この上ない。

何、血だらけの身体を誇らしく見せびらかしてるんだ？

「坂咲……?ユウ……?ま、まさか……!!」

無駄に視界に割り込んでくるヘンタイを踏み潰していると、後ろから声が聞こえた。

「あん？」

振り返ると、例の男が驚愕を浮かべながら立ち尽くしていた。

「……その眼…間違いない……、でもユウは男だった筈じゃ……？」

何やら俯いてブツブツ呟いているが、よく聞こえない。

「あゝ！？何ブツブツ言ってるんだ」

170後半の身長、バイクも無いのに持っているヘルメット、そのヘルメットの後頭部にある傷、昨日俺の投げたナイフも引ったくり犯のヘルメットの後頭部に当たって弾かれた。  
以上の事を総合して考えると……

「この引ったくり犯が!!」

そう言われた男はピクリと身体を震わせ、ぎこちない動きでこちらを見た。もはや、確定的だ。男の表情が全てを物語っている。  
それを見た途端、頭の中で何かが外れた。

ゆっくり男に近付いて行く。男は後ずさるうとするが、小石に蹴躓き、尻もちをつく。

「ユ、ユウ、待て！オレだ！鷹眼鏡也だ!!たかのめきょうや同じ小学校だった!!」

男 鷹眼鏡也は焦って言うが、

「知るか！ボケェ!!」

怒りが先行してまともに考える事が出来ない。

拳を固く握り締める。

「ちよっ！…まっ！…！うぎゃあああああ！…！」

作者：ここから先はR指定になりますので、御想像にお任せします。

## 6と64の・1乗（後書き）

えー……新キャラは鷹眼鏡也の方です。メインキャラになります。  
イモ子は……なんだろ？（笑）  
気が向いたら出てきます。

作者的には次話から本編です。 おっせえゝ  
不在だったツツコミ担当がやっと出て来ましたから

鷹眼鏡也の詳しい話は次回

これからは投稿が不定期になりそうです。別に何かあると言っ訳でもないですが…

最悪でも月1以上で行こうと思っています。  
楽しみにしてくれてる人が（居なさそうだけど）いたら申し訳ないです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9231o/>

---

不条理って響カッコいいけど、腹立たない？

2011年3月30日21時08分発行